

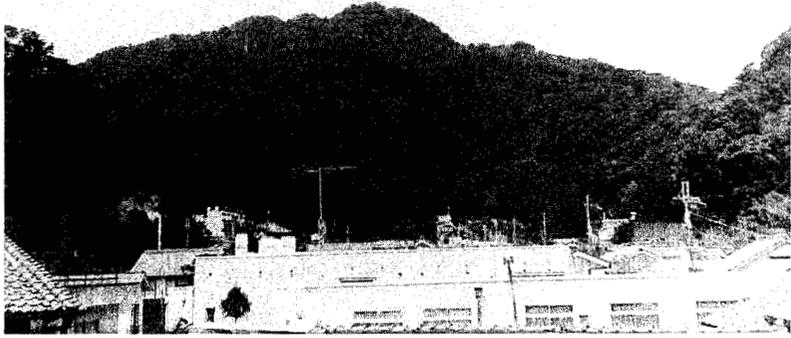
謹呈

土井正

題字 長谷寺驗記（鎌倉時代末期写）  
上卷第十一話より集字

目次

與喜天満神社	1
初瀬の土地柄	4
初瀬の地主神	9
與喜天満神社の由緒	12
社殿	15
御神像	19
覆屋	23
拝殿	25
神輿	27
祭礼と渡御巡幸	30
境内の鳥居と石造物	35
石造物（三）石碑	47
聖跡廿五靈社順拝双六とその概要	60
連歌	79
長谷寺縁起	82
あとがき	84



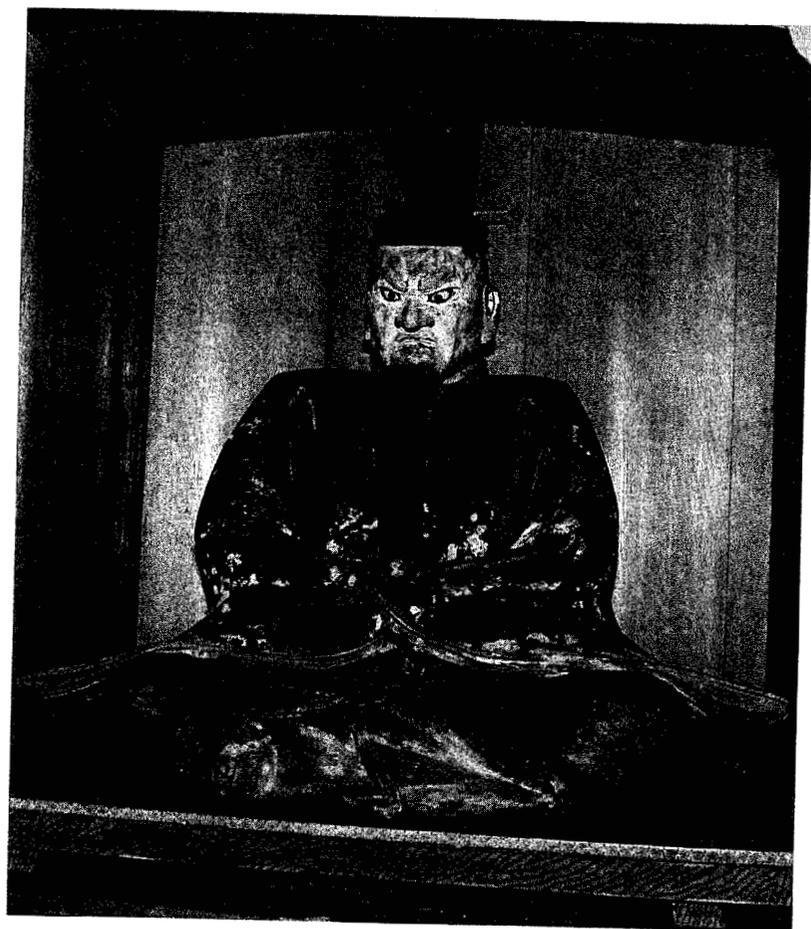
与喜山遠景



初瀬町入口と鳥居跡



天神橋と参道



御神像



参道



本殿と覆屋

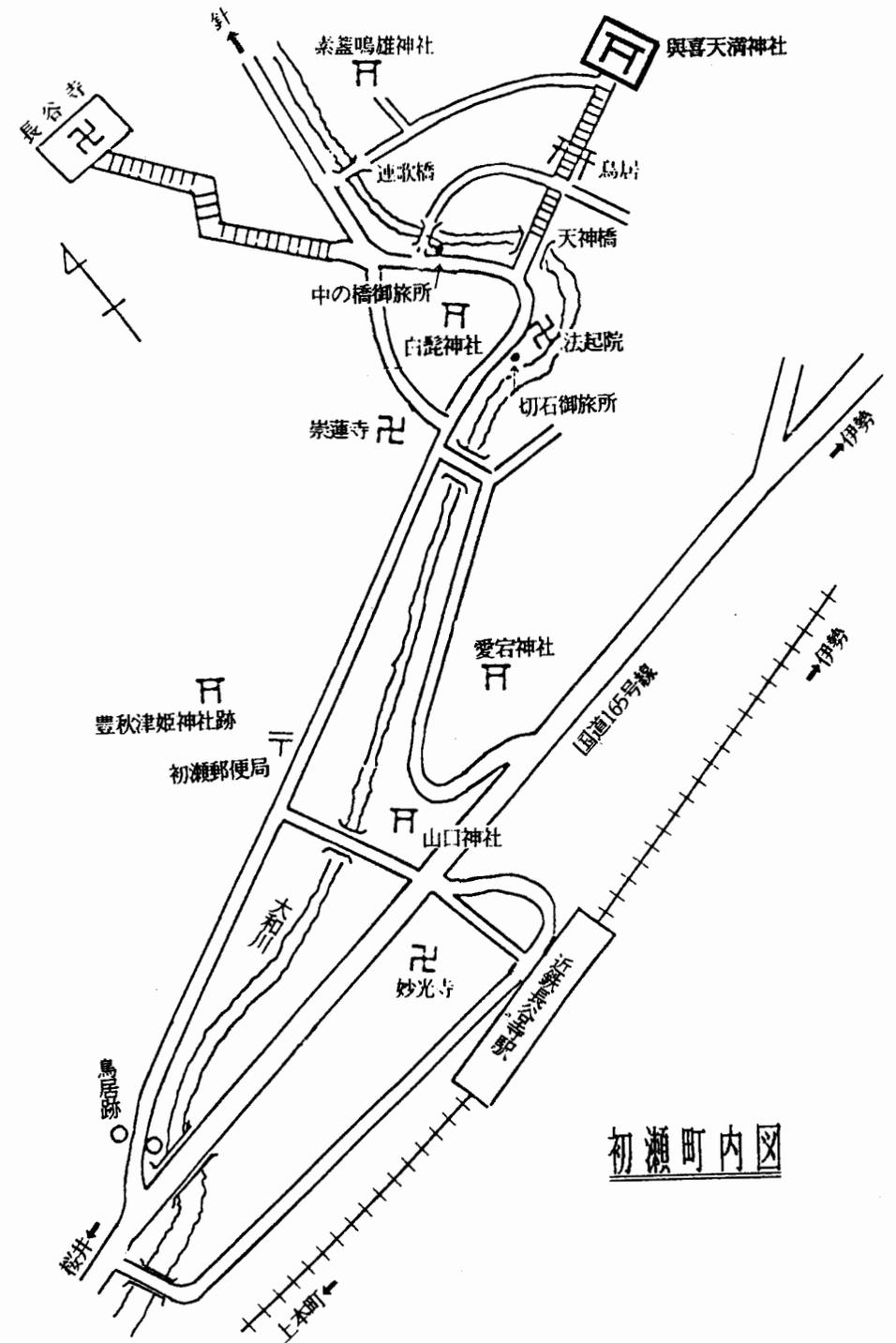


本殿と向拝



西  
天  
神  
聖  
廟





初瀬町内図

## 与喜天満神社

与喜天満神社は近鉄大阪線長谷寺駅の右手向こう、西国三十三ヶ所観音霊場第八番札所長谷寺の東方にこんもりとした原生林の山、標高四五五m、植物体系で国の天然記念物に指定されている山が与喜山(天神山)である。その西側の中腹、標高二一四m、参道口の天神橋から標高差約六二m、石段数二七五段を上った広場に西向きに鎮座されている。

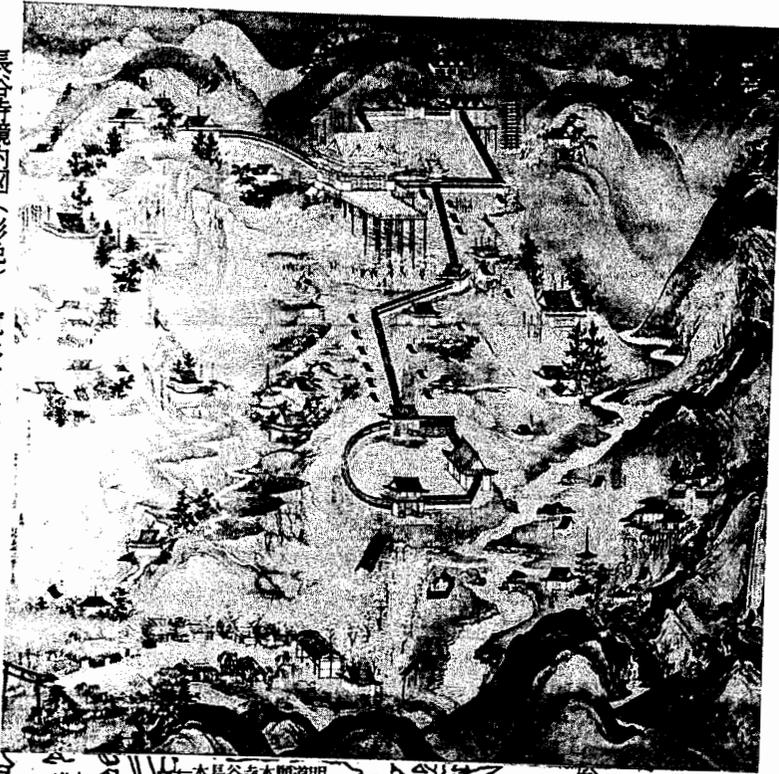
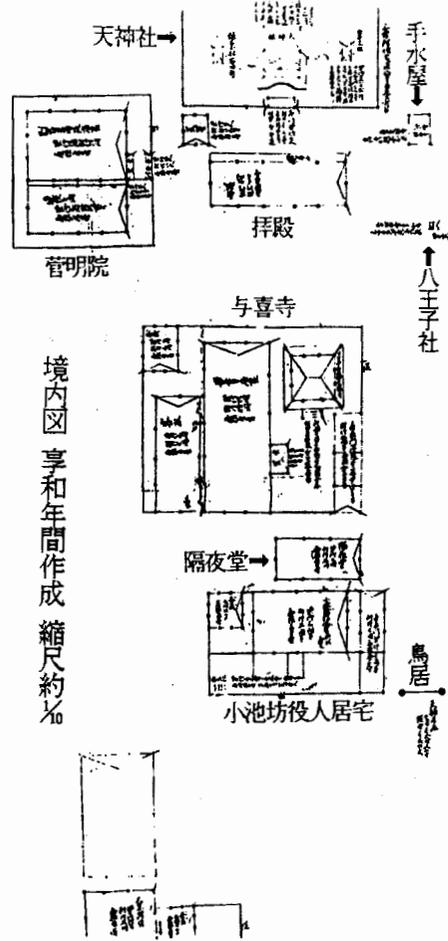
敷地は、明治維新の神仏分離令と昭和二〇年頃の農地解放令により与喜天満神社の境内は極端に狭くなり、朱塗りの鳥居から石段の両側約三m巾での神殿までと、神殿周辺の広場と合わせてちょうど杓子状の土地で、鳥居の所で巾約六m、奥行約九八m、一番巾の広いところで約四三m、面積約三六八〇平方m(約一八四〇坪、六反二畝)である。

長谷寺に保存されている寛永一五年(一六三八年)八月に絵師狩野織部佐藤原重頼が描いた『長谷寺境内図』によれば、与喜天満神社境内と思われる付近には名称まで付けられて、与喜天神、拝殿、如宝経堂、八王子、三重塔、与喜寺、荒神堂、天神橋前に鳥居が描かれている。

また、享和年間(一八〇〇頃)に描かれた長谷寺境内の建物の大体の位置と、その大きさ(寸法)を記した図によると、与喜天満神社本殿、脇殿白太夫社、脇殿櫻葉社、拝殿、

荒神堂、菅明院（連歌之間、庫裏）、手水鉢屋形、与喜寺、八王子社、隔夜堂、鳥居、小池坊役人居宅等、多くの建物が記録されている。

このように、以前は大変賑わっていたであろう境内は、明治維新の神仏分離令のために仏閣関係の建物は総て取り除かれ、本殿周辺だけの神殿だけが残された。そして、長谷寺本堂横の瀧蔵権現三社が與喜天満神社本殿の右側に遷座された。そのために櫻葉社を左に移動遷座し、白大夫社を本殿と櫻葉社との間に遷座され現状のように祀られ、境内の様相は前記の『長谷寺境内図』からは一変してしまった。



長谷寺境内図(彩色) 寛永十五年  
縦一七五・二程 横一八〇・五程

長谷寺 観音への折り  
より転載



## 初瀬の土地柄

與喜天満神社を語る前に、初瀬という土地の神聖さについて考えてみたい。

現在、西国三十三ヶ所観音霊場第八番札所長谷寺の東方に国の天然記念物に指定されている与喜山原生林がある。この山は昔から天照大神の影向された御神体山として信仰され、大泊瀬山、因曼陀羅胎蔵峰、三燈峰、一代山、日出山、天神山、八色岡と多くの名前をもった山である。

菅原道真公は長谷寺十一面観世音菩薩を深く信仰し、何度となく長谷寺に参詣され、「当山は是天照大神隱蟄の地、諸神冥道の守護の砌なり。鳥居を立て以て神明を崇めば、山内清澄なるべし」と話され、自ら鳥居を建立する場所を指示し、里の西の入口に大鳥居を建立された。それは昌泰元年（八九八年）十二月のことで、額（菅原道真公銘 安井御門跡道信卿書 功德成就鑿 諸佛經行砌 諸天神祇在 此山振威験）も掲げられた。しかし残念乍ら天文十四年（一五四五年）に倒壊し、すぐ再建されたが、再度享保五年（一七二二〇年）夏、小池坊十八世秀慶僧正が建て直しをしている。高さ三丈一尺（約九・四米）、幅二丈四尺（約七・三米）の大きさの大鳥居である。額銘は東寺の長者檢校法務東大寺兼華嚴宗長吏道怒大僧正の揮毫であった。しかし残念ながら、天保十二年二月二六日の火災

によって焼失し、今はその礎石の一部が残っている。銅の額は長谷寺大講堂に移されたが、明治四十四年の大講堂の火災によって焼失してしまった。

また、長谷寺の豊山玉石集に『此の鳥居の東の山の麓には手力雄命、西の山の尾には豊秋津媛命鎮座し玉ふ。一説にこの二神を伊勢大神宮の相殿とす。天照大神隱蟄の地と菅公宣へる。併せ思ふべし』と記している。このことで菅公が大鳥居を建立された目的が説明されているようである。そして、絵師狩野織部佐藤原重頼が寛永十五年八月吉日に描いた『長谷寺境内図』には、この鳥居に「伊勢太神宮大鳥居」と説明記入されている。

ここで初瀬の地と天照大神と深い関係がわかる。そこで天照大神の御霊がどのような経過で伊勢神宮に鎮座されたかを訪ねてみたい。

日本国を代表する神は天照大神で、その御霊を代々の天皇が身近でお守りされ、神武天皇から第九代開化天皇までは天照大神の御霊と同じ御殿で起居を共にされていたが、天照大神の神威に畏れられ不安が高まってきた。そこで天皇は御霊をお慰めするため、改めて齋部氏に命じて石凝姥命に天香具山の土から天照大神の御霊としての鏡をつくらせられた。そして第十代崇神天皇はその六年、皇女豊鋤入姫命に命じて大和三輪山の麓、笠縫邑に磯城神籬を立て天照大神の御霊を祀らせたことが、天照大神の御霊と天皇とが別々の建物に住まわれることになった初めである。

その後、豊鋤入姫命は天照大神の御霊の安まる聖地を求めて転々とされ、そして第十一代垂仁天皇の皇女倭姫命がそれを引き継がれて数十年の歳月を費やし、現在の伊勢の地に鎮座されたのである。

こうして御霊を奉じて遷幸されていった第三番目の聖地が桜井市初瀬にあったとされる伊豆加志本宮で、ここで豊鋤入姫命が八年間、御霊をお祀りされたと言われている。その具体的な場所は判然としないが、与喜山の麓付近ではないかという説もある。

天照大神の御霊が天下られてより、現在の伊勢の地に遷幸されていった経路は概略次の通りである。

御鏡の作成 かがみつくりにいまするまてすみたま 鏡作坐天照御魂神社 なごら 奈良県磯城郡田原本町八尾

日前国懸神宮 ひのくまのくににかかす 和歌山市秋月

天照大神 御霊 御遷幸の経路

御杖代 みづき 豊鋤入姫命 とよすきいりひめこと

一、笠縫邑 かさぬいのむら 奈良県桜井市三輪

二、吉佐宮(元伊勢皇太神宮) よさのみや 京都府加佐郡大江町宮山

三、伊豆加志本宮 いづかしのもののみや 奈良県桜井市初瀬

四、奈久佐浜宮(浜の宮) なくさ はまのみや 和歌山県海南市毛見

五、名方浜宮 なかたはまのみや 和歌山県海南市高浜

六、美和之御室嶺宮 みわの みむろのみむろのみや 奈良県桜井市三輪

御杖代 みづき 倭姫命 やまとひめこと

七、阿紀宮 あきののみや (阿紀神社) 奈良県宇陀郡大宇陀町迫間

八、佐佐波多宮 ささはたのみや (篠畑神社) 奈良県宇陀郡榛原町山辺三

九、隱市守宮 なげりのいしりののみや (蛭子神社) 三重県名張市鍛冶町

十、穴穂宮 あなほのみや (神戸神社) 三重県上野市上神戸

十一、阿閉柘殖宮 あへつみえのみや (敢国神社) 三重県阿山郡伊賀町上柘植

十二、日雲宮 ひくものみや (立志神社) 滋賀県甲賀郡甲西町三雲

十三、坂田宮 さかたのみや (岡神社) 滋賀県坂田郡近江町宇賀野

十四、伊久良河宮 いくらがわのみや (天神神社) 岐阜県本巣郡巣南町居倉

十五、中島宮 なかしまのみや (酒見神社) 愛知県一宮市伊勢町本神戸

十六、野代宮 のしろのみや (野志呂神社?) 三重県桑名市多度町下野代

- 〃 (神館神社?) 三重県桑名市江場神戸
- 七、鈴鹿小山宮 (忍山神社) 三重県亀山市布気
- 六、藤方片樋宮 (加良比乃神社) 三重県津市垂水
- 五、飯野高宮 (神山神社) 三重県松阪市山添町宮の前
- 四、伊蘇宮(磯宮) (磯神社) 三重県伊勢市磯町
- 三、滝原宮 (多岐原神社) 三重県度会郡大宮町三瀬川
- 二、滝原宮 (滝原宮) 三重県度会郡大宮町野後
- 一、五十鈴宮 (伊勢神宮 内宮) 三重県伊勢市宇治館町

## 初瀬の地主神

1.

我が国の地主神は、古事記での天照大神と大國主命との國譲り神話から、大國主命である。その大國主命が大和盆地の中央の東、三輪山に降臨され、三輪山自体が御神体となつて大神神社として祭祀されている。その三輪山の南の谷の奥に三輪山を小さくしたような山がある。これが初瀬「与喜山」である。

この与喜山にも大國主命が三輪山と共に地主神であられたと思われるが、与喜山(初瀬)の地主は大國主命の御子の下光比売命(大倉比売命)にお譲りになつたのではないだろうか。それは与喜山頂の磐座に下光比売命の御霊が祀られていたと伝えられている。ところがその御霊が何時の頃から、与喜山の中腹に鎮座する與喜天満神社の北脇に鍋倉神社として遷座され、延喜式内社に指定された。その後、鍋倉神社は与喜山麓に移され、明治維新、神仏分離の政策により鍋倉神社は素盞鳴神社境内に移されたが、どうしたことか今はその祠は秋葉神社に変わり、そのために下光比売命の御霊は、素盞鳴神社の御祭神素盞鳴尊と相殿で合祀され、式内社鍋倉神社の姿は消えてしまった。しかし与喜山麓に鎮座されていた場所には「鍋倉垣内」の地名が残っている。

ここで大国主命に係わって、小彦名命が地主神ではないかとの説もある。即ち、大国主命が出雲の海岸で小彦名命と出合った。その時、高御産巢日神が二神に協力して国を治めるように話された。それから二神は協力して農作、医薬等を開発し国を治めたことから、小彦名命の地主神説が生まれたものと思うが、この初瀬には小彦名命に関係した具体的な伝承はない。

2.

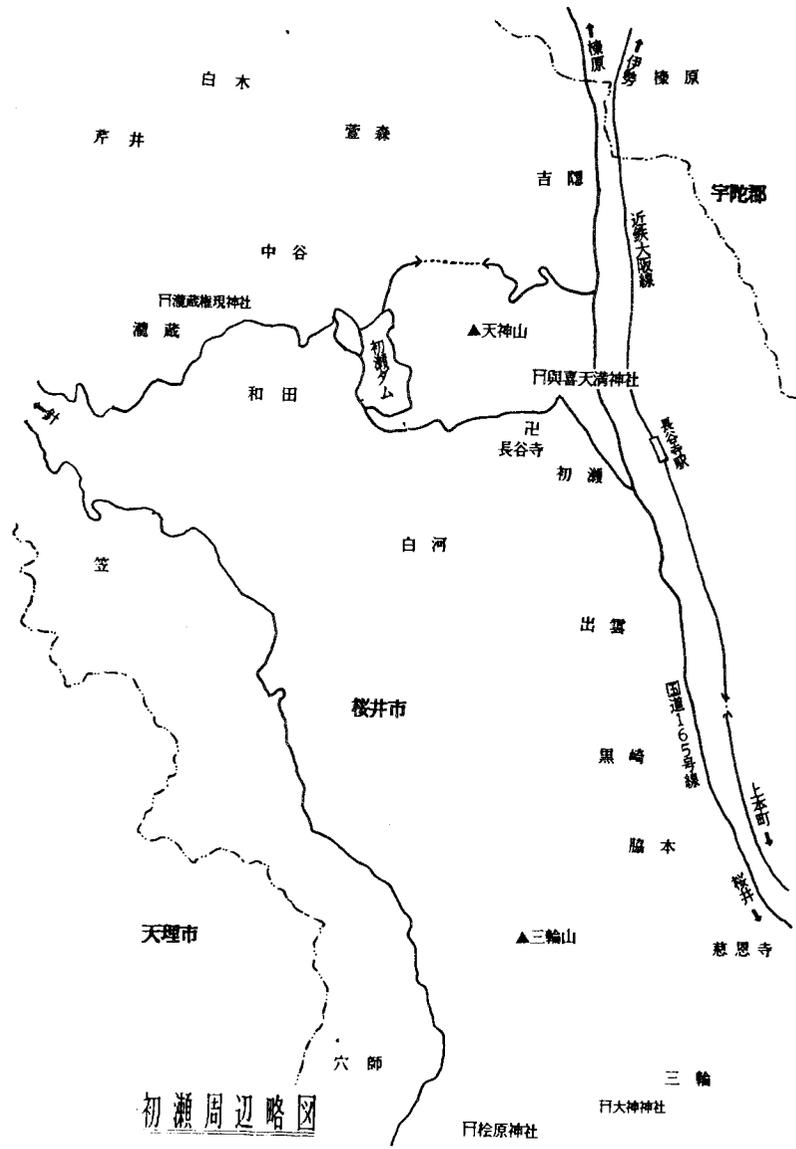
初瀬の地主神は、瀧蔵権現とされてきた。それは、初瀬川上流の瀧蔵山頂に、神武天皇の御宇に明星天子（神名不詳）が降臨され、三社（伊弉諾尊・伊弉冉尊・速玉命）を祭祀された。これが瀧蔵権現となられた。

また、聖武天皇、天平五年癸酉秋八月十五日の夜、長谷観音堂の東側の平らな場所に明星天子が僧侶の姿で降臨され、徳道上人に親しく合われて、「私は上古より三神里の地主神である。今重ねて十一面観音堂を守護する。」と誓約されている。このことから初瀬の地主神は瀧蔵権現であることがわかる。

3.

本書、由緒の項で述べるように、初瀬の地主神であった瀧蔵権現が、その地位、役目を天満大自在天神に譲られたことについては、歴史的に長谷寺が興福寺や東大寺との間に、

また、長谷観音信仰と藤原氏・春日大社等との間に何等かの要因があったように想像されるが、現在の初瀬の地主神は菅原道真公である。



初瀬周辺略図

## 與喜天満神社の由来

第六十一代朱雀天皇の頃、初瀬の里に神祇大夫武鷹という人がいて長谷寺で難行を心がけ仏道の修行に励み、靈力を身につけ、時の天皇のお悩みをも取り除くなど、神仏の深い御心に沿った暮らしを送っていた。

武鷹が天慶九年九月十八日の夜、長谷寺観音堂で修行中、少しまどろんだ寅の刻頃に夢を見た。それは烏帽子狩衣を着た翁が突然現れ「私は大威徳験の神である。この山に住んで大聖にお会いしたく思う。」と話されたところで夢から覚めた。

武鷹が不思議に思っていた二日後の夕方、一人りの翁が武鷹の家の前の石に狩衣装束でぼんやりとした様子で座っていた。しかしその容姿は気高く思えた。よくよく見るとこの人は十八日の夢に見た人である。武鷹は不思議に思つて近付くと翁は立ち上がり観音堂の方へ歩き始め、一丁ほど進んで四つ辻から川に下りて水を浴び、路傍の石に腰を下ろし疲れた様子だった。武鷹は早速家に戻り食べ物を持参したが、すでに翁の姿はなく楢坂を登らずに小路を進まれた。武鷹は道明上人廟の前で追いつき、そこでお酒、食事をお進めした。翁は会釈し喜ばれたがすぐ観音堂へと向かわれた。そして十一面観世音菩薩の宝前で念誦された。続いて観音堂の東に鎮座する瀧蔵権現社の前で念誦された。すると急に空か

ら黒雲が下りてきて翁を覆い、その雲が拝殿の中まで流れ込んでいった。武鷹は益々不思議に思い目をこらしていると、黒雲が晴れ、狩衣装束であった翁は束帯装束に変わり、多くのお供と共に拝殿から出てこられた。猶よく見ると瀧蔵権現社の御宝殿の扉が開き、中から束帯装束の人がお供を連れて翁の前に出て挨拶を交わされ、共々に拝殿に登り話し合われた。

翁 「私は右大臣正二位天満天神菅原の某である。無実の讒奏によつて西方（大宰府）に遷された。その時悪心を起こし多くの人々を損じた。その罪業に深く苦しんでいる。この山に住んで大聖に値遇してこの苦悩を取り除きたく思う。そこでこの山に社一つ分程の土地をお与え下さい。」

瀧蔵権現 「私は昔からこの山の地主神として初瀬の川上に住んでいる。この地は仏法相應の地で鎮護国家の場所として、この宝座は化度利生の瑞相、金剛不動の宝石である。昔から衆生の福分が多い時はこの宝座が顕われ、頭が少ない時は小福となる。今は釈迦の宿縁が少ないが宝座は顕われている。これを護衛し大聖（十一面観世音菩薩）の法度をお助けするために本拠の山（瀧蔵山）を出てここにいる。私は静かに本拠の山に戻り遠くからこの伽藍を守護し、時には十一面観世音菩薩にお会いしたく思う。願わくは、この山を今から貴殿天満天神の君に譲ろう。そして永くこの山の地主神に

なつてもらいたい。」と申されると、

天神「どの場所に住めばよいでしょう。」と尋ねられた。すると瀧蔵権現は東方の山（大泊瀬山）にある松の大樹を指さして、

「あの松の本は因曼陀羅峰として断悪修善に最もよき地である。あの大樹の下に住むがよいであろう。」

これを聞かれた天神は、即座に雷神となって天に登り鳴り響き、指示された松の大樹の下に鎮座された。このことが與喜天満神社の起り（天慶九年九四六年）で、はじめ三年間は神祠もなく松の大樹を御神体としていたが、武廬に神託があつて、天曆二年（九四八年）七月武廬が松樹の本に宝殿を建て御神霊をお祀りしていたが、改めて同年九月二十日に現在の神殿の地に社殿を建て、郷内で氏神として祀つたのが與喜天満神社で、日本で最初の天神社といわれている。

瀧蔵権現の話の中で、天神のおさまる場所を指定されたとき最もよき地である。と申されたことから、與喜の地名が生まれたといわれている。

神殿大夫武廬は役行者の再身ともいわれている。

## 與喜天満神社 社 殿

鳥居から杉の大樹に挟まれた百数十段の石段の上に石垣があり、後の山から高さ一四〇厘の瑞垣が社殿を囲うように正面中央に中門を置き、三面延べ約五〇米めぐらされた中にそれぞれの社が鎮座されている。ただ八王子社は参道の石段脇に鎮座している。

〔中 門〕

平唐門 桁行二三〇厘 梁行五五厘 虹梁

屋根は柿板葺であつたが破損がひどくなり、平成四年四月現在の銅板葺に修復された。

〔本 殿〕

流造三間社破風付造 梁行二七〇厘 桁行一八〇厘 向拝二七〇厘 高欄付

屋根松皮葺 覆屋を付けている。

堂々とした建物で、斗と肘木の組物が三手先で正面は五組と見事な軒回りである。正面は二枚の両開きの扉で、その両側の板壁には立派な彫刻が施されている。

現在の本殿は棟札から長谷寺第三九世能化唯阿僧正が文化十五年二月二〇日に再建されたことがわかる。（文化十五年 一八一八年）

本殿内に残された棟札のなかに本殿の屋根葺替等で文化十五年以前の次のような棟札がある。

・(表) 葺替所天神社 吉寛文九乙酉稔 五月吉祥日 小池坊僧正頼意代

年預梅心院住俊盛 菅明院住了性

・(表) 葺替所天神社 元禄十三庚辰敷 五月吉祥日 小池坊第十四代僧正英岳

年預慈心院住龍壽 菅明院宥賢

(裏) 皆日記日文明四壬辰年六月吉祥日彩色之

(註) 寛文九年：一六六九年 元禄十三年：一七〇〇年 文明四年：一四七二年

本殿前の両側に狛犬がある。

享保六辛丑年三月吉日 泉州堺の布屋善右衛門・同平二郎・同久右衛門・同治兵衛

同市右衛門 が寄進している。

### (撰社)

長谷寺古図 寛永十五年(一六三八年)には、本殿を挟んで右に白太夫社、左に桜葉社と参道の脇に八王子社が記されているが、現在の瀧蔵権現社は記されていない。

白太夫社 春日造高欄付 屋根は銅板葺 桁約六五櫃 梁約八五櫃 向拝巾二二〇櫃

向拝一〇〇櫃

### 御祭神

度会春彦

### 御神徳

子孫繁栄

### 由緒

菅原道真の父菅原是善卿が、世継ぎの誕生を伊勢神宮の青年神官度会春彦に託して豊受大神宮(外宮)に祈願されて誕生されたのが菅原道真である。

それ以来度会春彦は守役として道真公に仕え、菅公亡き後、ご遺品を土佐高知におられた菅公の長男のもとへ届けられ、その地で七九才の生涯を閉じられた。度会春彦は若い頃から白髪であったので白太夫と呼ばれたという。不明であるが、本殿の再建と同時期のように思われる。

### 創建

・桜葉社 社殿は白太夫社と殆ど同型

御祭神 伊子親王

### 御神徳

喉の病氣平癒・音楽(声楽)上達の守護神

### 由緒

伊子親王は桓武天皇の第三皇子で中務卿と大宰帥を兼任していたが、藤原仲成(なかむね)の陰謀によって謀反の罪を負わされ、母と共に川原寺(奈良県高市郡明日香村)に幽閉され、そこで毒を飲んで自害した。しかし後に冤罪がはれ、弘法大師が伊子親王母子の霊を弔い川原寺で法要を営まれた。また川原寺の修行僧達も一切経の写経を奉納したということである。

伊予親王は管弦演奏の名手であった。

八王子社 春日造 屋根銅板葺 桁約四八櫃 梁約四五櫃 向拝巾九八櫃

向拝四〇櫃 大きな岩盤の上に鎮座されている。

御祭神 天照大神 素盞鳴尊

御神徳 家内安全・家族繁栄・五穀豊穡

由緒 不詳

瀧蔵権現三社 春日造 屋根銅板葺 桁約一〇〇櫃 梁約九三櫃 向拝巾一九〇櫃

向拝五〇櫃

御祭神 本殿より 速玉命・伊弉諾尊・伊弉冉尊

御神徳 家内安全・繁栄 五穀豊穡 疱瘡の治癒

由緒 この三社は明治五年の神仏分離によって長谷寺本堂横の三社がこの場所に

遷座されたものである。従って櫻葉社が少し北に寄り、本殿との間に白太夫社が遷座され現在の状況になった。

### 御神像

與喜天満神社の御神像菅原道真公は束帯姿の座像で容貌は険しく憤怒の形相で「怒り天神」とよばれているそのもののお姿である。

昭和三年八月十七日より文部省古社寺保存会の手によって解体修理された際の記録によると、御神像は寄木造の等身大の神像で、両側に袖をひろげ、目は玉眼で全体に彩色が施され、巾子冠を戴き、袍を着け、袖に隠した両手に笏を持ったお姿で座っておられる。

調査時の報告された御神像の法量は次の通りである。(尺貫法)

頭冠頂上までの高さ	三尺一寸六分	肘	張	一尺九寸七分
頭頂上までの高さ	二尺五寸七分	膝	張	二尺四寸八分
顔 長	六寸三分	膝	奥	一尺九寸
顔 巾	五寸四分	腕	長	二尺八寸
顔 奥	七寸七分	笏	長	八寸三分五厘

そして胎内の背面に次のような墨書銘があった。

奉造立

與喜大明神

御正躰一躰

勸人善阿弥陀仏

正元元年己未五月八日

(正元元年…一二五九年)

その上、珍しいことに、御神像の頭部の中に、縦に一面の神鏡が納められていた。

神鏡は六稜形で、径六寸二分、重さ二百六匁、

表面：長谷寺本尊十一面観世音菩薩の御影を細線で彫刻し、頭髮には群青を唇には紅

を点じ、盤石にお立ちではあるが、錫杖はお持ちではない。

裏面：梵字風の文字が八文字あり、古代日本文字との説があるが残念ながら解読され

ていない。

この神鏡について真偽のほどは不明であるが次のような話が伝えられている。

長谷寺勝永坊行円が加賀白山で参禅している時、甲斐の国の男にであつた。するとその男は明神影向のしるしを見せようと云つて、天を仰いで大きく息を吐くと、それが忽ち頭光となり、その中から十一面観世音菩薩が顕われ、同時に鏡一面が飛んできた。それは、天禄二年七月一日午の刻だつた。行円はそれを受けて持ち帰り同年八月三日に長谷寺観音堂の西北の隅に祠を建て、祀つたという。その夜、長谷の里には大雪が降つたという。

この話の中で、甲斐の国の男は何らかの神様であつたのかもしれない。また、菅原道真

公の本地が十一面観世音菩薩とされているから、この神鏡が菅原道真公に縁があつて神像内に納められたのではないだろうかと思像する。

このほか御神像の南隣の厨子には六躰の小神像が安置されている。その中で二躰は彫刻途中の感じで、容姿も判然としない状態である。他の四躰の作は粗雑ではあるが御神像のお姿である。作風は平安時代様式を感じさせる御神像もある。この御神像は毎年秋の例祭の際、神輿に順番に搭乗され初瀬町内を渡御巡行されていたが、現在は神輿の都合上、新しくされた御神像が代行されている。

天曆二年神殿太夫武麿の発願によつて与喜山の松の大樹の下に社殿を造営して菅原道真公の御霊を祀つてより、現御神像が祀られた正元元年までの約三百二十年間の御神体は何を御神体にされていたのか、神鏡か、幣を祀られていたものか、または前記の小神像が祀られていたのか判然とはしないが、小神像が祀られていたのではないかとの思いを深くする。

社殿に残されていた棟札から、昭和四年御神像修理の際に、相殿神と共に厨子が新調されている。従つてそれ以前の御神像はそのままのお姿でおいでになつたので、御神像の色があせ御神像が損傷したのではないだろうか。

その時造られた厨子の右の扉には松、左には梅の絵が描かれている。

左の厨子には本御神像を小さくしたような、江戸中期頃の作と思われる菅原道真公の御神像が安置されている。



御神像胎内鏡表面



御神像胎内鏡裏面

近畿日本鉄道、近畿文化会編  
大和路新書8より転載

## 覆屋

本殿を保護するために造られた建物で大変な気の配りようである。

いつ頃から建てられていたものかは不明であるが、文化十五年の本殿再建以前に覆屋の修理に関して次の棟札が残されている。

・(表) 正徳四年甲午天四月吉日 小池坊第十七世僧正隆慶  
年預 金蓮院秀榮 別当菅明院昌春

(裏) 菅明院住和州窪氏昌春房文意

・(表) 宝曆二壬申歳 五月吉日 小池坊第二四世僧正信怒  
年預 慈眼院元怒 別当 菅明院有慶

・(表) 宝曆二壬申年五月十二日 棟梁尾州名古屋住 上原甚蔵  
上原新平政家 上原新助政次 山田甚助政長

(裏) 奉上屋総葺替 明和五年戊子九月吉日 尾州名古屋住今和州初瀬川上住  
上原甚蔵 桜井善助 小池久蔵 秋山清吉

・(表) 奉上屋葺替 宝永九子年十一月吉日 初瀬川上棟梁 上原甚蔵 同政治郎  
小池久蔵 小林和助

(裏) 御上葺 天満宮御屋祓方  
この後、続いて文政十年に覆屋の再建をし、これより約百五十年後の昭和五十三年に覆屋の造替がなされ現在に至っている。



拝殿の側壁に書かれた落書き  
昭和37年(1962)7月26日撮影

## 拝殿

拝殿は本殿の下の広場を挟んで西に建てられている。拝殿の創建は不明であるが次のような拝殿修復の棟札があることからそれ以前の建物である。

(表) 正奉葺当社覆屋并拝殿 正徳四甲午天 四月吉祥日 小池坊十七世僧正隆慶

年預 金蓮院秀榮 別当菅明院昌春

(裏) 正奉葺当社覆屋并拝殿小池坊十七世菅明院住和州窪氏昌春房文意

この拝殿は、昭和六十年に屋根の修理と壁を塗り替えた間口七間、奥行二間、前に半間の濡縁ぬれえんのある建物である。そして、向かって左端の一室に昭和五三年まで使用されていた神輿みこしが収納されている。

拝殿が修理されるまえまでは、向かって右側面の壁一面に落書きがあった。落書きそのものについては良いとは言えないが、年月が経過した今となつては、與喜天満神社へ遠くから参拝者のあったことがわかる。そのことで岡田泉師僧正おかたこうしが豊山学報とよやまがくほうに次のように発表されている。

昭和二十八年の秋、台風があった数日後、思うともなく天神社へ詣で何心なく拝殿のよこへまわつてみて驚いた。嵐のために白壁が剥落したその下に、無数の落書きが、或は濃く或は淡く、毛筆もあり、鉛筆も交り、中には木片で引つかいて、二間四方のかべは余白も

ないほどのヒドイ落書群である。あまりのきたなきに上塗りをかけて隠したものが、今また落ちて昔の姿を現したのである。なるほどこのこれは、法隆寺や、東大寺三月堂、唐招提寺、西大寺のそのような文化的価値はない。しかし私たち郷土人にとっては尊い記録を意外なところから発見したものであると喜びに堪えない。明治五年から同じ三十年頃までの、大阪、京都、堺、北海道、青森、秋田、山形、岩手、宮城、新潟、石川、栃木、群馬、東京、埼玉、神奈川、静岡、三重、奈良、兵庫、広島、鹿児島、と判読できるだけでなくこんな府県名が入り交っている。廃藩置県間もない頃であるから、武蔵、下総、越後、加賀、陸中などと国名も使っている。もちろん與喜天神自らか悉くこうした諸国の人たちを呼びよせたのではなく、一には伊勢参宮者が長谷観音へ立ちよる余瀝を受けたもの、二には長谷観音即與喜天神（胎内鏡の示すが如く）という信仰鼓吹に依るものと思うが、とにかく半世紀前までの隆盛をこの落書に見て、うたた今昔の感に堪えないものがある。以下略。

そして、この十年後の台風でこの落書のある壁の一部壊れた。辛うじてその時の写真で偲ぶことができるが、昭和五年の修理の際、新しい壁が塗られ以前の様子は全部消えてしまった。なお、軒に掛けられていた連歌の額も今は無くなってしまっている。

## 神輿

現在の神輿は、昭和五四年、従来の神輿が大きく、重かったので神輿渡御巡行が困難となり、小型で重量も軽くした神輿が藤一建設株式会社より寄贈され、渡御巡行の神事を受け持っている。

従来の神輿は、拜殿に向かって左端の一室に収納されている。

従来の神輿は、巾約二二〇糎、高さ約一三〇糎、担ぎ棒約一一〇糎、全長約三四〇糎で総漆塗り、そして角々には細かく彫金された唐金の板が張られている。形は八角形、屋根は八角の陣笠形で、黒の漆塗り。角の稜線は丸く盛り上げ朱が塗られているが、その先には蕨手があったのではないだろうか。頂きには金色の大きい鳳凰が乗せられる。正面は朱塗りの扉になっており、他の七面は黒地に金で梅鉢の紋章が大きく描かれている。軒は黒の屋根の裏に朱色の挿が細かく並べられている。内部の天井は細かい格天井、床には四角の黒漆塗りの台座があり、神輿渡御巡行の際、御神像を安置するための座布団が置かれている。とにかく立派な神輿である。

この神輿が造られた時期は不明であるが、長谷寺に保管されている與喜天満宮祭礼図（長谷寺第二四世能化信怒僧正が描かせた）の中にこの神輿が描かれているが、この図では

梅鉢の紋章は屋根に描かれている。また残された記録には、文政三年（一八二〇年）に神輿の修理が行われている。

〔註〕信怒僧正・能化就任 延享三年（一七四六年）〜宝暦十年（一七六〇年）



収納されている 神輿



長谷寺-観音への祈り-より転載

眞喜天満神社祭礼区 掛軸

(彩色図)

大きさ 絹 一五五・三厘  
江戸時代中期の作

長谷寺第二四世信怒僧正  
能化就任

正が描かせた祭礼図  
延享三年（宝暦十年）  
一七四六〜一七六〇年

# 祭礼と神輿渡御巡幸

1

與喜天満神社の祭礼と神輿渡御巡幸は、鎌倉時代末期これ毎年九月二十日に斎行されてきている。

創始当時は長谷寺と與喜天満神社が一体となり、與喜天満神社の諸行事については長谷寺がそれを運営していた。即ち、長谷寺山内の六坊が順番で例年祭を担当していた。その後長谷寺との關係を保ちつ、「頭仲間」という宮座が組織され、與喜天満神社の祭礼を齋行していった。

創始当時の祭礼の様子は、「大和名所記」「大和名所図会」等に詳しく記載されている。また、長谷寺に保存されている「與喜天満宮祭礼図」では、祭礼・神輿渡御巡幸の様子が異時同図で描かれているので具体的にそれを知ることができる。

ここでこれ等を総合して当時の神輿渡御巡幸のようすを再現してみたい。

一、祭礼祭典終了後、午前二時頃、神殿前で御神体の御分神を八角形の神輿に移し拝殿前の広場におろす。ここで行列を整えて渡御巡幸に出発する。

二、天神橋の下方「切石御旅所」(武鷹の家の前)の石上に奉置する。ここで長谷寺坊中から出仕して、管弦を奏し、甘酒を供え能を舞った。

三、切石御旅所の奉齋をすませ、つぎは「中の橋詰御旅所」(翁が水垢離をした所)前で奉置し、前場所切石御旅所と同様に管弦を奏し、甘酒を供え能を舞った。

四、中の橋御旅所の奉齋をすませ、つぎは夜明けまでに神輿を長谷寺仁王門前(翁が道明上人の廟の前に居られた時、武鷹が神酒等を勧めをした所)で奉置し、夜五ツ(午後八時頃まで奉置される。

(これまでの神輿渡御巡幸の行程は、由緒の項で述べた翁と神殿太夫武鷹との出会いから翁が瀧蔵権現と語り合われた場までの再現である。)

五、神輿が仁王門前に奉置されている間、郷中から甲冑を着け馬に乗り、あるいは歩立の武者、また陣笠に胴丸の具足を着し弓、鉄砲を持った武者、そして幼い子供達が破魔弓を背負った大勢の行列が町内をにぎにぎしく練り歩いた。それを警護するため町内から羽織を着た人達が多数奉仕をしている。また夜には仁王門前に能舞台が造られ、かがり火の元で能と狂言が五番奉納される。町々からは太鼓台がくりだし、太鼓を打ちながら神様を元氣付け、夜が更けてから神輿は本殿に帰還され、御分神が神殿に還幸される。

この情景は美しく見事なもので、近郷からはこの「初瀬祭り」を一目見ようと多くの参拝者、見物客で初瀬の町も大変賑わったという。

本殿脇の菅明院では連歌会が催される。連歌会では菅原道真公の御影を床に掲げ、長谷寺の能化をはじめ、連歌衆が参加されていた。(連歌の項参照)

2

明治初期に神仏分離令が施行されたために、與喜天満神社の祭礼については「頭仲間」に代わって「与喜敬神社」(略して敬神社)が組織され、従来通りの祭礼行事が継承されていた。そして祭礼日が太陽暦の十月二十日に移っていった。

ところが、神輿渡御巡幸について、長谷寺仁王門から與喜天満神社本殿還幸されず、仁王門から町内そして与喜浦御旅所を渡御巡幸されるようになった。そして還幸されると鑿座の鵝形石の上にはしばらくの間安置されてから御分神が神殿に還幸される。

3

與喜天満神社祭礼の神輿渡御巡幸は第二次世界戦争のため、昭和十二年(一九三七)か二十年(一九四五)と翌昭和二十一年(一九四六)の間は中止された。

4

昭和二十二年からは従前通りの神輿渡御巡幸は復活した。ところが神輿の損傷と重量の関係で、軽量で小型の神輿が藤一建設株式会社から昭和五十四年二月に奉納されその責めを果たしていた。

しかし、社会情勢の変化により神輿の担い手が不足し始め、昭和六十二年から渡御巡幸は中止となった。

5

氏子の念願により平成五年(一九九三)十月より神輿渡御巡幸を復活することになった。與喜天満神社秋の例祭が斎行される日は大きく変化し、十月二十日に近い日曜日、となった。それに伴って神輿渡御巡幸の行程は以前と大きく変更された。それは初めの渡御巡幸の主旨から変化し、町内渡御巡幸に重点が置かれている。

即ち、午前十時からの祭典を終え、御分神を神輿に遷し、本殿前広場で一声氣勢をあげ、午前十一時頃神輿渡御巡幸の出発となる。順路は次の通りである。

與喜天満神社出発↓切石御旅所↓伊勢辻橋↓国道一六五↓与喜浦御旅所↓国道一六五↓  
馳向区妙光寺↓国道一六五↓初瀬小学校前↓折り返し↓町内↓参急橋南詰↓折り返し↓  
町内へ↓初瀬郵便局前↓切石御旅所前通過↓中の橋詰御旅所↓長谷寺前(仁王門前には  
寄らない)↓川上区↓見返不動尊前↓折り返し↓連歌橋↓寺垣外区内↓與喜天満神社還幸

このように時代と共に変化簡略化をされているが、何とかして伝統ある初瀬祭りを持続されるべく氏子一同、與喜天満神社社務所では努力している。

# 與喜天満神社境内の鳥居と石造物

〔鳥居〕  
 (それぞれの所在場所は、與喜天満神社境内図の番号による。)

初瀬川に架かる天神橋から石段八十余段上に旧伊勢街道に面して立っている。

高さ 約五八〇糎 巾 約四八〇糎

創建は不明であるが、額銘は藤沢遊行寺第十四代他阿上人太空和尚の筆の伝えがある。  
 現在の額は「天神宮」の銅額で、書は□□法親王 □の部分は塗料のため判読不能

裏面銘 奉掛和長谷寺与喜山／天神宮鳥居額／諸願成就之所

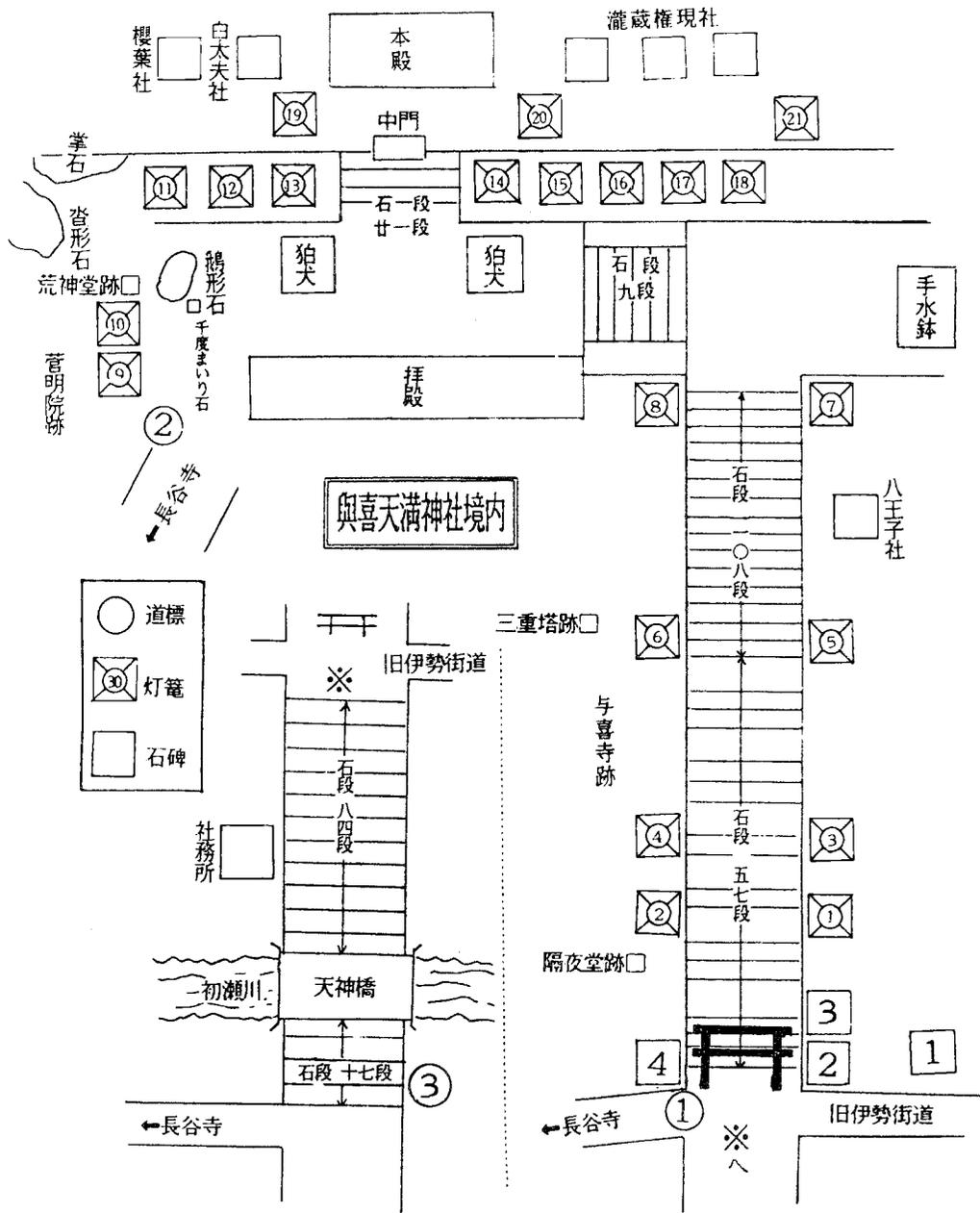
□二月吉祥日 大阪心斎橋筋 松下七郎

額の大きさ 縦八〇糎 横四七糎

〔磐座〕

与喜山には数ヶ所に磐座が点在しており、その中で與喜天満神社境内に三ヶ所の磐座が本殿の前の石垣の下にあり、それぞれの神様が鎮まっておられる。

- 鵝形石：天照大神 千度まいり石の隣 大きさ 巾二〇〇×一五〇 高さ 七〇糎
- 杵形石：天児屋根命 鵝形石の左上 大きさ 巾二五〇×三二〇 高さ一三〇糎



掌石…太玉命

杓形石の右上

大きさ 巾三〇〇×一六〇 高さ二〇〇糎

この三つの磐座は古事記に記載されている「天の岩戸」の様子を再現しているようである。即ち、天照大神が天の岩戸にお隠れになった時、神々が相談をして、太玉命は天の岩戸の前に立てた榊に八尺瓊の曲玉と、八咫の鏡を飾り付けた。天兒屋根命はその前で祝詞を奏上した。その甲斐があつて天照大神を元に戻っていただくことができたという。

〔狛犬〕

右側 台座正面 奉 左面 慶応三年（一八六七年） 丁卯正月

基壇正面 紀国屋徳兵衛 宇田屋清七 銭屋善兵衛 萩原屋清次良

井谷 金 扇屋又市良 辻屋与八 灰屋茂兵衛

灰屋長七 豊屋長七 吉住貞造 郡山屋半兵衛

鍵屋治右衛門 味間屋祢兵衛 紺屋平次良 油屋安兵衛

戸屋祢市良 榎屋五兵衛 角屋勘之助 播磨屋吉兵衛

小西矢右衛門

基壇左面 発起人 仁興屋祢清治良 留師屋祢兵衛 丁子屋清蔵

狛犬の大きさ 狛犬高 一〇四糎

狛犬台座 巾 七四糎 奥行 四三糎 高 一五糎

唐風台座 巾 八七糎 奥行 六一糎 高 八糎

上段基壇 巾 一一〇糎 奥行 八九糎 高 五八糎

中段基壇 巾 一一二糎 奥行 一一七糎 高 四三糎

下段基壇 巾 一八六糎 奥行 一五三糎 高 三五糎

左側 台座正面 献 右面 天神講中

基壇正面 福知屋源兵衛 桶屋七兵衛 河井主人 興喜板兵蔵

興喜板兵助 辰巳屋清治良 熊野屋喜兵衛 吉野屋喜兵衛

吉野屋栄治郎 ねずみ屋嘉兵衛井谷屋源六 江戸屋善六

角屋善六 増屋利兵衛 胡麻屋又三良 灰屋平助

田中屋 米 伊勢屋 春 檜皮屋甚蔵 井谷屋源治

形状 右側狛犬とほぼ同形

〔手水鉢〕 銘 慶安三曆（一六五〇年）九月吉日／与喜山／奉寄進／手水鉢

上辺間口 一三三糎 奥行 七二糎 下辺間口 一二六糎 奥行 七二糎

高さ 七八糎

水溜 間口 一一一糎 奥行 五〇糎 深 三〇糎  
手水屋 梁行二四〇糎 桁行二七五糎 屋根瓦葺かわらぶき

〔註〕境内最古の石造物 慶安三年（一六五〇年）

長谷寺本堂の大改修の年に寄進されている。

〔千度まいり石〕

高 九八糎 巾 一七糎 厚 一四糎 側面銘 判読困難

〔道標（みちしるべ）〕

1. 正面 ひだり いせみち

右面 施主 伊三郎

高 七五糎 下部巾 四六糎 上部巾 三三糎

下部厚 二六糎 上部厚 一三糎

〔註〕この道標は道路の反対側にあったものが移動させられている。

2. 正面 ひだりくわんおんど

高 九〇糎 上部巾 三〇糎 下部巾 五〇糎 厚 二〇糎

〔註〕この道標の書体は、与喜浦内伊勢街道の道標に似ている。

与喜浦区内道標 「くわんおんちか道」 享保五年（一七二〇年）建立

3. 正面 天神道

高 七三糎 巾 六七糎 厚 一八糎

〔註〕この道標は移動している。下部をセメントで固定され裏面下部の文字は読めない。

〔石碑〕

1. 正面 桜楓樹植培記念

裏面 昭和二年（一九二七年）十一月 長谷寺事務長 塚本賢暁

奈良営林署長 天田次衛

高 一四〇糎 巾 三三糎 厚 一五糎

2. 正面 天然記念物与喜山暖帯林

右面 昭和三十二年（一九五七年）十二月八日指定

左面 昭和三十五年（一九六〇年）三月十日建立

裏面 文化財保護委員会

石碑高 二二一糎 巾 三〇糎 厚 二八糎  
台座高 四一糎 巾 七七糎 厚 七九糎

3. 正面 聖跡廿五拜第六番 与喜浦山天満宮寶前 東京沙門行誠書  
左面 発起人東京松浦武四郎

高 一〇三糎 巾 一八・五糎 厚 一八・三糎

〔註〕この石碑については別の項で述べる。

4. 正面 本朝菅廟十霊社随一 与喜天神宮

右面 本社より観音えゆきぬけ

石碑高 一一八糎 巾 三八・五糎 厚 二五糎

台座高 五五糎 巾 一一七糎 厚 八〇糎 丸味のある台座

〔註〕本朝菅廟十霊社については不明。

#### 〔石燈籠〕

1. 正面 常夜燈 左面 上森町 裏面 嘉永元年（一八四八年）申九月

総高 一九〇糎 宝珠高一五糎 笠高一七糎 火袋高二八糎

形態 四角柱型

竿高 六八糎 二重基壇高 四七糎 最下基壇巾 六七糎

2. 前記六・石燈籠と同形

3. 正面 天満宮 左面 岩井幸治 宮崎善七 裏面 享和年二月吉日

形態 神前型

総高 二七六糎 宝珠高二八糎 笠高二〇糎 火袋高三三糎

竿高 六〇糎 四重基壇高一一九糎 最下基壇巾 一四六糎

4. 正面 天満宮 右面 端山門人中 左面 燈明施主寺垣内社中

裏面 享和二年（一八〇二年）二月吉日

形態 前記三・石燈籠と同形

この石燈籠は、與喜天満神社の別当菅明院で営まれた連歌の会に談山神社関係の方々が参加し、その人達が石燈籠（三）と共に寄進されたものである。

〔註〕長谷寺第九世能化頼意僧正（寛文六年（延宝三年）が江戸中期に連歌を復興した

時、多武峰たぶのみねから忍可しのりという宗匠そうじょうを迎えて指導を受けたという。

5. 正面 奉獻てんじ(篆書) 左面 昭和八年(一九三三年)二月廿二日

裏面 大阪南堀江 岩西利恒建之

形態 神前型しんぜんがた

総高 一六三 宝珠高 四〇糎 笠高 二六糎 火袋高 三一糎

竿高 六四糎 三重基壇高 八六糎 最下基壇巾 九八・五糎

6. 前記石燈籠五・と同形

7. 正面 与喜社 常夜燈

右面 文化六年己巳歳(一八〇九年)九月吉日 菅明院 宥辯代

裏面 竹村又左衛門尚規 遠江入野

形態 変形神前型

総高 三〇三・五糎 宝珠高 二四糎 笠高 二六糎 火袋高 四八糎

竿高 九八糎 五重基壇高 九一・五糎 最下基壇巾 一九〇糎

この石燈籠は、竹村又左衛門尚規が菅明院宥辯僧正に依頼して寄進したものである。

竹村尚規は、連歌の会に参加していた人のようので次の歌が残っている。

はつせ山はるはる遠くまうて来て 祈るころは神もしるらむ

ねかはくは神もあはれとみしめ縄 た、ひとすしにたのむ心を

寛政十二年庚申年(一八〇〇年)九月吉日

8. 前記七・石燈籠と同形

9. 正面 常夜燈 裏面 寛保二壬戌年(一七四二年)二月

10. 正面 常夜燈 右面 寛保二壬戌年二月

裏面 的場某

形態 神前型

総高 一八九・五糎 宝珠高 二三糎 笠高 一七糎 火袋高 二八糎

竿高 五三糎 二重基壇高 四六糎 最下基壇巾 七〇糎

最下基壇に「下川上中町」の銘あり

〔註〕この九、十の一对の石燈籠は、以前この地に『鍋倉神社』が鎮座し、その社前に設置されていた石燈籠と伝えられている。

11. 正面 常夜燈 右面 寛政十一年己未年(一七九九年)九月

形態 神前型

総高 一一五糎 宝珠高 三五糎 笠高 一一糎 火袋高 三一・五糎

竿高 七〇糎 二重基壇高 四五糎 最下基壇巾 一一六糎

最下基壇に 施主衆中 の銘あり

12. 正面 常夜燈 右面 寛政十一己未年九月吉祥日

形態 左面 施主 辻井 某  
神前型

総高 一五九糎 宝珠高 四一糎 笠高 二二糎 火袋高 三二糎

竿高 六八糎 二重基壇高 四五糎 最下基壇巾 一一六糎

13. 正面 永代常夜燈 裏面 弘化三丙午年（一八四六年）八月吉祥日 辻屋與八

形態 四角柱型

総高 一三三七糎 宝珠高 二八糎 笠高 一三糎 火袋高 三一糎

竿高 八六糎 二重基壇高 五一糎 最下基壇巾 九七糎

14. 正面 永代常夜燈 裏面 弘化三丙午年八月吉祥日 灰屋長七

形態 前記三、石燈籠と同形

15. 正面 無銘 左面 享和二年（一八〇二年）二月

形態 神前型

総高 一三〇糎 宝珠高 三五糎 笠高 一二糎 火袋高 三四糎

竿高 六六糎 二重基壇高 四九糎 最下基壇巾 一一四糎

16. 正面 常夜燈 左面 享和二年二月  
最下基壇に銘あり 施主衆中 石工 忍坂 庄之助

形態 他の銘は前記 十五石燈籠と同じ

17. 正面 常夜燈 右面 寛政十二年（一八〇〇年）九月

形態 神前型

総高 一一三糎 宝珠高 三六・五糎 笠高 一九糎 火袋高 三六糎

竿高 六一・五糎 二重基壇高 四四糎 最下基壇巾 九五・五糎

最下基壇に 施主衆中 の銘あり

18. 正面 常夜燈 右面 □□□年九月吉日

形態 神前型

総高 一二七糎 宝珠高 四〇糎 笠高 一九糎 火袋高 三五糎

竿高 六六糎 二重基壇高 五一糎 最下基壇巾 九六・五糎

19. 正面 献燈 右面 大和国十市郡櫻井 施主 山本幾登

左面 明治二十三年（一八九〇年）寅六月吉日建之

裏面 周旋方 五味原長七 中山萬吉 圓井清三郎

形態 四角柱型

総高 二七〇糎 宝珠高 四八糎 笠高 二六糎 火袋高 三二糎  
竿高 九六糎 三重基壇高 六八糎 最下基壇巾 九七糎

20. 前記六、石燈籠と同形

21. 正面 与喜山天神石燈籠 明暦元乙未年（一六五五年）七月大吉日

形態 四角柱型

総高 一二五糎 宝珠高 三〇糎 笠高 二七糎 火袋高 三八糎 竿高 八二糎  
基壇高 一五糎

〔註〕境内最古の石燈籠 明暦元年



明暦元年銘石燈籠

## 與喜天満神社境内石造物 石碑（三）

正面 聖跡廿五拜第六番 與喜山天満宮寶前 側面 発起人 東京 松浦武四郎

この石碑は、松浦武四郎が菅原道真の聖跡の中から二十五社を選出し、各社にこのような石碑と鏡が奉納された。

松浦武四郎は文政元年二月六日、三重県一志郡三雲町小野江で松浦桂祐の四男として誕生した。七才のとき、真学寺来応和尚に手習いを学び、十三才で津藩の平松楽齋に漢学を習得している。十七才では京都、大阪の学者を訪ね学問を積み重ねていった。

二十八才で初めて蝦夷地へ渡り、更に翌年蝦夷・樺太を訪ね、江戸への帰途「佐渡日誌」「日光余誌」を記し、三十二才に三度目の蝦夷地の探検を実施し、「蝦夷大概図」「三航蝦夷日誌」などの著作を刊行している。

三十八才、幕府より「蝦夷地御用のお雇い入れ」の命を受け、幕府の役人として蝦夷地の調査を行い、「東西蝦夷山川地理取調図」二十八冊を刊行している。

明治維新後には蝦夷地開拓御用係となり、北海道名、道内国名、郡名を選定し、北海道の命名者として従五位開拓判官に任命され「北海道の名付け親」と称賛されたが、明治三年（松浦武四郎五十三才）で自分から官職・位階を辞している。

蝦夷地の探検に始まり日本六十余州の深山の探查や、和歌・漢詩・絵画・篆刻等、多芸多才ぶりを存分に発揮した偉人である。特に注目すべきことは、アイヌ人の良き理解者であつたことであろう。

松浦武四郎は明治七年頃より全国の神社仏閣の参拝・参詣の旅を始め、その後、ことに天神信仰を深め、菅原道真の聖跡の順拝を念願し、京都北野天満宮に参拝した時、加藤清正が同神社に奉納していた大神鏡（裏面は日本地図）に魅了された。そこで京都鏡師金森頼輔に大神鏡を造らせ、知人、有識者、地元神社氏子等、多方面からの協力を得て、明治八年に京都北野天満宮と東京上野東照宮へ、十二年に大阪天満宮へ、十三年に大和吉野山威徳天満宮へ、十五年には福岡大宰府天満宮へ夫々の神社へ奉納している。そうこうしている時、明治十四年の初夢に菅原道真公の聖跡数ヶ所とその順拝の路程を教えられたという。そこで夫々の聖跡に神鏡と石碑（神鏡の前記五神社以外には直径約二十五糎の小神鏡）と併せて河鍋晩斎の絵馬を奉納し順拝されようとしたが、残念乍らこの願いは果たせなかつたようである。後日、略記の明治十七年の項に次のような記録がある。

三月十八日 紀州高野山に登らんとて旅途に付き、大和、河内、和泉、摂津、播磨、但馬、丹波、若狭、越前、近江、山城等を経て 六月十八日東京に帰り、甲申遊記を著す。（明治十七年は甲申の年）

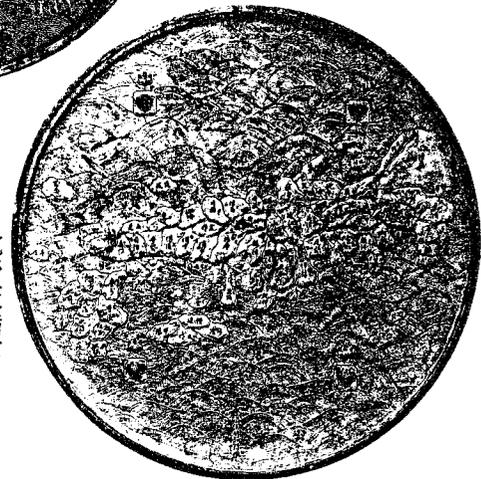


大宰府天満宮  
奉納 松浦武四郎

松浦武四郎記念館発行  
松浦武四郎記念館図録より転載



北野天満宮  
奉納 松浦武四郎



北野天満宮  
奉納 加藤清正

北野天満宮発行えはがき  
日本地図三大鏡より転載

奉納大鏡

此の行に、諸所の天満宮二十五ヶ所に鏡及建石を納む。

この記録から聖跡廿五霊社各社への神鏡、石碑の奉納は済まされたようである。この発想には、娘イシが明治八年に他界した心痛も加わっていたかもしれない。

以上のことから松浦武四郎はこのことを双六すうろくにすることを思いたち、明治十九年（松浦武四郎没前二年）に菅原道真公の聖地二十五ヶ所と、その周辺で菅公に関連した聖地を加えて、京都菅原院天神きょうとうがはらいんてんじんを振出しふかだしに、菅原道真が大宰府だざいふに向かわれる道中を順次西下し、大宰府到着後折り返して京都に向かい、摂津上宮天神せつじょうこうてんじんから北野天満宮で終わる双六が作成された。

その後、友人で考古学者であった岸根武香が松浦武四郎の遺志を継いで左記①が刊行され、別に②が刊行された。

① 千歳記念御神蹟女具梨全図 明治三十四年十二月十五日発行

② 聖跡二十五霊社順拝雙六 松浦武四郎造 古梅居士題

ここで松浦武四郎が各神社へ奉納した神鏡と石碑の概略を述べる。

〔大神鏡〕 大きさ直径約一米

鏡裏面には、奉納日、地図、歌、協賛者氏名、鏡製作者等が鑄込まれている。

北野天満宮 京都市上京区御前通今出川馬喰町

〔神鏡奉納寄付人〕 山田茂七

〔奉納日〕 明治八年六月二十九日 鏡の銘 明治七戌年五月吉日

〔地 図〕 日本本州北部・北海道・樺太

〔歌〕 幾としかおもいふかめし北の海

道ひくむすてになし得つるかな

〔銘〕 明治七戌年五月吉日 松浦武四郎阿倍弘

〔鏡作者〕 山城国金森禰輔作

上野東照宮 東京都台東区上野公園

〔神鏡奉納寄付人〕 松浦武四郎

〔奉納日〕 明治八年

〔地 図〕 日本全土の地図

〔歌〕 東照る御稜威ひびとは北の海 南の小嶋西の国まで

富岡百鍊 秦蔵六 山田茂平

〔銘〕 明治八年亥年 松浦武四郎阿倍弘

〔鏡作者〕 山城国住 金森禰輔作

大阪天満宮 大阪市北区天神橋二丁目

〔神鏡奉納寄付人〕 風月堂

慶応二年（一八六六年）風月堂栄次郎が松浦武四郎宅を訪問している。

〔奉納日〕 明治十二年五月四日 鏡銘は明治十二年一月吉日

〔地 図〕 千島から沖繩までの日本地図

〔歌 〕 天満の神のころのかしこさを この神鏡の光にもしれ

幹 事 西京 山田茂兵衛・西京 富岡百鍊・西京 秦蔵六

東京 益田友雄

〔 銘 〕 明治十二年己卯一月吉日 奉拝聖跡廿五社 松浦武四郎阿倍弘

〔鏡作者〕 鏡匠山城国住金森禰輔作

吉野天満宮 奈良県吉野郡吉野町吉野山

〔神鏡奉納寄付人〕 松浦武四郎

〔奉納日〕 明治十四年五月二十八日 鏡名は明治十三年五月

〔地 図〕 吉野熊野修験場七十五なびき靡の各場所名と、それに関連した場所百余ヶ所が

ちゅうかんず鳥瞰図的に表現されている。

おおみなかがけはらいぎょうじ大峯中駟拔行者

幹事長 舊竹林院三十七世古澤龍敬

幹 事 大阪 北村栄治郎・大阪 小西善道・西京 山田茂兵衛

吉野 宮城晋一・吉野 古澤龍賢・前鬼 五鬼熊義真

〔 銘 〕 明治十三年辰五月 東京 松浦武四郎阿倍弘

〔鏡作者〕 西京金森禰輔

大宰府天満宮 福岡県大宰府市大宰府

〔神鏡奉納寄付人〕 小野湖山 名は愿 文化十年〜明治四十三年 滋賀県郷士

三井寺の鍋塚の碑文を書く。

〔奉納日〕 明治十五年五月九日 鏡銘 明治十四年五月

大神鏡は明治三十七年に焼失したが、その拓本が三重県三雲町松浦武四郎記念館に掛軸になって保存されている。

〔地 図〕 菅原道真の聖跡が鳥瞰図的に表現されているが、中央部が歌の文字のためにうまく写しだされていない。

〔歌 〕 あふぎみればいよいよたかし 二十五天満宮の威稜在所

〔 銘 〕 明治十四年辛巳五月吉辰

奉拝聖跡二十五社 東京 松浦武四郎阿倍弘

幹事 西京 山田茂兵衛・西京 北村徳次郎・大阪宮崎□□衛

筑前 江藤正嶺・筑前 栗原祢兵

〔鏡作者〕 鏡匠西京金森禰輔作

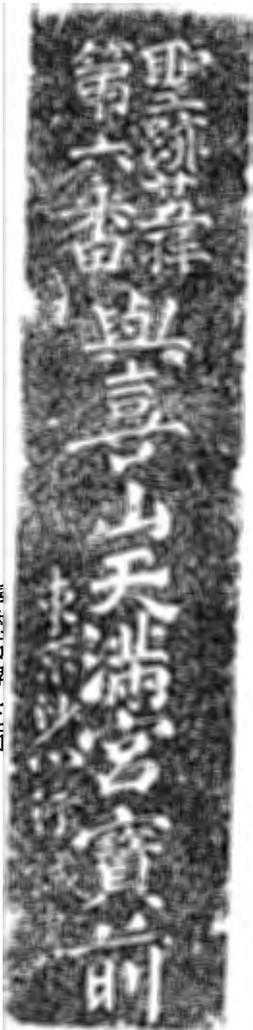
以上の外に、上宮天満宮には松浦武四郎の遺志を汲み有志によって大鏡が奉納されている。大きさは前記五社とほぼ同じである。

〔銘〕中央に大きく『上宮天満宮』と上方に「上」の文字を挟んで奉納と書かれている。

上宮天満宮の文字を挟んで 右側に神鏡講社 左側に明治廿二年四月吉日 下方に世話人の氏名が列記されている。

上田辺村	松下京太郎	高槻村	松下仙太郎
高槻村	前川源次郎	上田辺村	東村藤太郎
上田辺村	田辺増次郎	全 村	貝沼代助
全 村	寺本熊吉	富田村	好田三治郎
全 村	川村三四郎		
左下	京都六角	中嶋吉次郎	手傳方
		細工人	山本石松
			上田勇之助
			下駒太郎

奉納  
石碑  
小神鏡



奉納石碑 正面



奉納石碑 側面



奉納鏡

聖跡第六番  
與喜山天満宮  
施主 松浦武四郎



揮毫者 印

〔小神鏡〕

前記六社以外の神社へ奉納された小神鏡（大きさ直径約二十五糎）の裏面には大体次の文字が鑄込まれている。

右側：聖跡〇〇番

中央：〇〇〇天満宮（大きな文字）

左側：願主 東京 松浦武四郎

〔奉納石碑〕

奉納石碑は、高さ一米前後、正面巾約十八糎 側面巾約十七・五糎 表面を平滑にし、尖頭形にした四角柱で安山岩が使用されている。

刻まれた文字は浅く判読が難しいものもある。碑文は大体次のようである。

正面 聖跡廿五拜 〇〇〇〇天満宮寶前

第 〇 番 碑文の揮毫者氏名

（石碑の碑文は、当時の著名人の揮毫によるものである。）

側面 発起人 東京 松浦武四郎 加えて世話人等の氏名が記入されたものもある。



# 聖跡廿五靈社順拝双六とその概要

〔文〕は双六に書かれている説明文を活字化した。

聖跡廿五靈社について、山中共古は『影守雜記』で聖跡廿五靈社を列記し併せて各社に神鏡を奉納した寄付者の氏名が記されている。(四社には神鏡奉納寄付人が記されていない。そして終わりの部分で、……廿五出来上がりしか否か、予は知らず、中略 以上故松浦翁より聞き手帳に記し置るを載す。明治十二年頃かと覚ゆ。と記されている。(山中共古は柏原学而を通じて松浦武四郎について学んでいる。)これを参考にして次のようにまとめた。

第一番 菅原院天神〔所在地〕京都市上京区烏丸通下立売下ル 菅原院天満宮神社すまはらいんえんてんまんじや

〔文〕天満宮と申奉るは、人皇五十四代仁明天皇の承和十二年六月廿五日、

菅原道真が烏丸の菅原院で御誕生まします。

〔神鏡奉納寄付人〕 松浦武四郎

〔鏡背面銘〕聖跡第一番 菅元院天満宮 願主 松浦武四郎

〔石碑文と揮毫〕聖跡廿五拜 第壹番 菅原院天満宮寶前 巖谷 修

〔揮毫〕巖谷 修 近江藩士(滋賀県)書家 天保二年〜明治三八年

明治三二年貴族院議員に選出された。

〔由緒〕菅原道真公の誕生地である。

第二番 錦 天 神〔所在地〕京都市中京区新京極四条上ル 錦天満神社にしきてんまんじや

〔文〕四條の社を源の融の靈也と云へども、それは傍の小社にして本社は天満宮にて靈驗著るし。

〔神鏡奉納寄付人〕 日下部鳴鶴 名は東作 天保九年〜大正十一年 東京都

養父日下部三郎右衛門は桜田門の変に殉じている。

書家。明治維新で徴士になる。

〔鏡〕存在不明

〔石碑〕存在不明

〔由緒〕菅原道真の旧邸菅原院の旧殿を六条河原院に移し、歡喜寺とし道真の靈を祀って鎮守社とした。

〔註〕明治初期の神仏分離令により境内、敷地に相当以上の変更があり建物も取り壊されたようである。また、昭和第二次世界大戦後にも土地改革があつて、現状のようになってしまったので、残念ながら神鏡、石碑の存在は不明のことである。

第三番 菅 大 神〔所在地〕京都市下京区仏光寺通新町西入ル 菅大臣神社かんだいじんじや

〔文〕御歳三十三の御時、紅梅殿を御造立有けるは今の菅大臣の地也。

〔神鏡奉納寄付人〕山本獻 京都嵐山天龍寺 文政五年〜明治十八年 書家

〔鏡〕存在不明

〔石碑文と揮毫〕聖跡廿五拜第三番 菅大臣天満宮竇前 従五位勲五等 金井之恭

〔揮毫〕金井之恭 上野国佐位郡（群馬県） 豪農

金井烏洲の第三子で父の志を継いで明治維新に活躍した。

〔由緒〕菅公の紅・白梅殿というお邸や、菅家廊下と称する学問所の跡で、菅公が

大宰府へ左遷の途路に次の有名な歌を詠まれている。

東風吹かばにほひおこせよ梅の花

主なしとて春なわすれそ

第四番 吉祥院〔所在地〕京都市南区吉祥院政町三 吉祥院天満宮きつしょういんせんまんぐう

〔文〕城南に吉祥院御造立有て、五十の御賀を御行せ玉ふ時、御会半に白衣したる

老翁、願文に沙金一袋を添て席上の机にのせて何處ともなく立ち去りしと。

〔神鏡奉納寄付人〕不明

〔鏡〕存在不明

〔石碑と文揮毫〕聖跡廿五拜第四番 吉祥院天満宮竇前 望月黙もち齋

〔揮毫〕望月黙もち齋は『乙酉掌記』に四月十六日夜、望月氏に泊す。とあるが、同一人物ではないだろうか。

〔由緒〕菅公の祖父清公が邸内に吉祥院を建て菅原家の氏寺とした。朱雀天皇承平四年（九三四年）菅原道真の像を刻み、社殿を建てて祀った。

第五番 長岡天神〔所在地〕京都府長岡京市開田 長岡天満宮ながおかてんまんぐう

〔文〕南御住居の時は、四時月に花に御遊覧有し地なりと。

〔神鏡奉納寄付人〕山本名は不明

〔鏡〕存在不明

〔石碑〕存在不明

〔由緒〕在原業平とここでよく遊んで詩歌管弦を楽しまれたゆかりの深い所。菅公大宰府へ左遷の途路、ここで「わが魂長くこの地にとどまるべし」となごりを惜しまれ、御自作の木像を残されたのをお祀りしたのが、当神社の創立である。

山崎休石天神〔所在地〕不詳

〔文〕君がすむ宿の梢を行々も かくるゝまでにかへりみしかな

大和国菅原社〔所在地〕奈良市菅原町 菅原神社

〔文〕添下郡菅原にあり、野見宿禰の遠孫古人道長等の住せし地なり。

〔由緒〕菅原道真の先祖から住んでいた土地。

第六番 長谷与喜山〔所在地〕奈良県桜井市初瀬 与喜天満神社

〔文〕大和国長谷町の上に有 公は当寺の観音を御信仰ありて其縁起をも認め玉ひしなり

〔神鏡奉納寄付人〕 松浦武四郎

〔鏡背面銘〕聖跡第六番 与喜山天満宮 願主東京 松浦武四郎

〔石碑文と揮毫〕聖跡廿五拜第六番 与喜山天満宮寶前 東京沙門行誠 印

〔揮毫〕福田行誠 武蔵国豊島郡(埼玉県) 文化三年(明治二十一年)

明治二十年知恩院院主・浄土宗管長

明治六年大教院が設置され教頭となり神仏両方面から尊ばれた

高僧である。

〔由緒〕本誌與喜天満神社由緒参照

吉野宮滝〔所在地〕奈良県吉野郡吉野町宮滝

〔文〕寛平十年十月廿二日帝に供奉し、吉野なる宮瀧御覽になりし時。

宮の瀧うべも名におひて聞えけり

落る白泡の玉と見ゆれば 御製

水引の白いはへてをる機は

たびの衣にたちやかさねむ 菅公

〔由緒〕菅公、昌泰元年(八九八年)十月廿二日当宮瀧に遊ぶ。

第七番 吉野大威徳〔所在地〕奈良県吉野郡吉野町吉野山 威王堂境内 威徳天満宮

〔文〕天慶四年日蔵上人笙の窟にて、神勅ありて勸請なし玉ふ也。

〔神鏡奉納寄付人〕 松浦武四郎

〔鏡背面銘〕大鏡 前記参照

〔石碑文と揮毫〕聖跡廿五拜第七番 威徳天満宮寶前 正五位 杉浦 誠

〔揮毫〕杉浦 誠 兵庫県 文政九年(明治三七年)

慶応二年箱館奉行 明治二年開拓権判官に任じ、以後函館に勤務

する。明治八年開拓使三等で出仕する。

〔由緒〕昔、大和吉野の金峯山に日蔵上人という高僧がいた。日蔵上人が吉野山中の笙の窟で修行中、承平四年(九三四年)八月一日頓死したが、不思議にも十三日目に蘇生した。そして、その間に六道を巡っている時、大威徳天になつてゐる菅原道真公に出会い、また、地獄の責め苦にあつていられる醍醐天皇

の靈にも出合った。そこで蘇生した日藏上人は急ぎ宮中に参内してこの由を時の天皇朱雀天皇に申し上げた。そこで天皇は早速亡父醍醐天皇の靈を慰められ、種々の善根を営まれ、菩提を弔らわれた。

このことがあって、日藏上人が大威徳天の菅原道真公を大自在天神として祠を建てて祀つたのが、この吉野威徳天満宮である。

第八番 道明寺天神〔所在地〕大阪府藤井寺市道明寺一丁目 道明寺天満宮

〔文〕河内の国土師の里に覺壽とて御姨君のおわせしに、川より程近きとて訪はせ玉ひしと。道明寺即これなり。

〔神鏡奉納寄付人〕 迎春堂 姓名は不明

〔鏡背面銘〕神殿内に納められている。様子不明

〔石碑文と揮毫〕聖跡廿五拜第八番 土師里天満宮 従三位勲三等 郷 純造

〔揮毫〕郷 純造 美濃国黒野（岐阜県） 文政八年（明治四三年）

明治二四年貴族院議員に選出される。

〔由緒〕菅公が大宰府への左遷の途路、伯母の覺壽尼に別れを惜しまれ、八葉鏡にお姿を映されて、犀角柄刀子で自像を荒木に刻まれ（現御神像）次の歌を残して西海に赴かれたのである。

鳴けばこそ別れも憂けれ鶏の

音のなからん里の暁もがな

第九番 佐田天神〔所在地〕大阪府守口市佐太中町七丁目 佐太天神社

〔文〕河内の国佐田は、大坂より三里にして風景佳絶の地なり。

〔神鏡奉納寄付人〕 河鍋暁斎 文政十一年（明治二十二年） 画家

〔鏡背面銘〕神社で保存 形は与喜山天満宮の鏡に似ているようだ。（神職の話）

〔石碑文と揮毫〕聖跡廿五拜第九番 佐太天 以下下部欠損不明

〔由緒〕菅公大宰府へ左遷の途路、菅公の領地である当地に立ち寄り自作の木像と自画像を残された。又この時使用された楊子を地に挿して、

「我が身の無実の罪たることの証拠として、二葉の松となって生い栄えよ」と誓われたところ、程なく発芽して、見事な松になったという。

第十番 天満天神〔所在地〕大阪市北区天神橋二丁目 大阪天満宮

〔文〕六月廿五日神事夜景。

〔神鏡奉納寄付人〕 風月堂栄次郎

〔鏡背面銘〕大鏡 前記参照

〔石碑〕第二次世界大戦の戦災のため存在不明となる。

〔由緒〕菅公大宰府へ左遷の途路、道明寺を経て難波崎に立ち寄られ、船待ちの間に孝徳天皇が大化元年に定められた難波長柄豊崎宮の守護のために祀られたという大將軍社に参詣され、大將軍の森から西下されたというこの大將軍社が天満宮の創始という。

北野天神〔所在地〕大阪市北区神山町九 網敷天神社（北天神）

〔文〕此邊り梅塚天神、北野天神など所々靈跡有しは、難波の梅を見廻り玉ひし古跡なり。

〔由緒〕菅公大宰府へ左遷の途路、梅の木の下で休息された。

第十一番 露 天 神〔所在地〕大阪市北区曾根崎上二・五・四 露天神社（お初天神）

〔文〕露とちる涙に袖は朽にけり 都のことを思ひいずれば

〔神鏡奉納寄付人〕市川万庵 名は三兼 天保八年く明治四十年 東京都 書・篆刻・点茶・弾琴等で知られた文化人。

〔鏡〕第二次世界大戦の戦災のため存在不明

〔石碑〕第二次世界大戦の戦災のため存在不明

〔由緒〕菅公大宰府へ左遷の途路、太融寺へ参詣のとき、この辺で露が深く、袖をひどく濡らされ、次の歌を詠ぜられたのが、露天神社の起こりという。

「露と散る涙に袖は朽ちにけり 都のことを思ひいずれば」

第十二番 福島天神〔所在地〕大阪市福島区福島 福島天満宮

〔文〕此處より船上りなし玉ひ、船頭茂太夫を案内とし大融寺に詣で玉ひしと。今上中下の三社となりたり。

〔鏡〕第二次世界大戦の戦災のため焼失存在不明

〔石碑〕第二次世界大戦の戦災のため存在不明

〔由緒〕菅公大宰府へ左遷の途路、船旅の風待ちに立ち寄り休息された。その時里人の織った布に自らの御姿を描かれた。これが現在の御神体になっている。

第十三番 尼崎長洲〔所在地〕兵庫県尼崎市長洲本通り 長洲天満神社

〔文〕公福島を船出なし玉ひしが、また風あらくなりし故長洲に上り玉ひ、須磨までは陸行なりしと。

〔神鏡奉納寄付人〕豊橋太古 詳細不明

『乙酉掌記』に四月十九日午訪豊橋山田太古。夜泊岡崎。とある。

〔鏡〕存在不明

〔石碑〕存在不明

〔由緒〕菅公大宰府へ左遷の途路この地に立ち寄られ、自画像に、「人しれず移る泪

の津の国の 長洲と見えて袖ぞ朽ちぬる」の讚をいれて里人に贈られた。

第十四番 須磨綱敷〔所在地〕神戸市須磨区天神町 綱敷天満宮

〔文〕公の家来として残りし者と分れて、二十五家となりて今に社に奉仕す。

〔神鏡奉納寄付人〕 風月堂 大阪天満宮の神鏡奉納寄付人と同一人物だろう。

〔鏡〕第二次世界大戦と平成七年の阪神大震災のため存在不明となる。

〔石碑文揮毫〕平成七年（一九九五年）の阪神大震災のため存在不明となる。

（記録）綱敷天満宮寶前 三田葆光

〔由緒〕菅公大宰府へ左遷の途路、海上風波高くこの地の上陸された際、舟人が舟の綱を丸めて円座を作りそこに休息していただいた。

第十五番 明石休天神〔所在地〕兵庫県明石市大蔵天神町 休天神社

〔文〕喜元年正月大宰権帥に任ぜられ此處を過玉ふ時、驛長迎奉りて嘆ければ、

驛長無驚時變改 一栄一落是春秋 と遊ばせられしと。

〔神鏡奉納寄付人〕 松浦武四郎

〔鏡〕存在不明

〔石碑文と揮毫〕聖跡廿五拜第十五番 休石天満宮寶前 湖山小野長愿

願主風月堂清白 （この石碑は所在不明 記録による）

〔揮毫〕湖山小野長愿 名 小野湖山 諱 長愿 近江国浅井郡（滋賀県）

文化十一年（明治四三年）

明治元年徴士となり、豊橋藩権小参事となる。

明治五年上京し、詩文をもって一家をなした。

鍋塚の碑文を書する（明治十六年七月）

〔由緒〕菅公大宰府へ左遷の途路、この驛で休息され、その時の「踞石」が境内に保存されている。

第十六番 曾根天神〔所在地〕兵庫高砂市曾根町曾根 曾根天満宮

〔文〕公御謫遷の時此地へ御立よらせ、自から植玉ひし松、今再植となりて盛たり。

社八天正六年秀吉公の再営にして巨大なり。

〔神鏡奉納寄付人〕 松浦武四郎

〔鏡背面銘〕聖跡第十六番 番播陽曾根天満宮 東京松浦武四

〔石碑文と揮毫〕聖跡廿五拜第十六番 曾根天満宮寶前 七十五才岡本迪謹跡

〔由緒〕菅公大宰府へ左遷の途路、伊保港に船宿りして日笠山に登り、祖先の神、天穗日命に祈って無実の罪の証に小松を現在の社地に植えて西下されていた。

第十七番 檜笠天神〔所在地〕兵庫県姫路市大塩 大塩天満宮

〔文〕南郡大濱村にあり。

うごゝめのくるみのからにだまされて 日笠の浦をめぐる山がら  
神詠なりと云傳ふ。

〔鏡〕存在不明

〔石碑〕存在不明

〔由緒〕菅公大宰府へ左遷の途路、伊保港より上陸し、大塩莊牛谷村普光寺（後の妙泉寺）に菅公が鏡を奉納したが、兵乱のため鏡は行方不明になる。しかし後に大塩次郎景範が現在地に社殿を移し菅原道真公を祀った。

第十八番 瀧宮天神〔所在地〕香川県綾歌郡綾南町瀧宮

なみのみせじんまゆじんせ  
瀧宮天満宮

〔文〕仁和四年讃岐国の任に在りし時、百日の旱魃に城山の神社に雨乞い給ひしかば  
忽雨ふりしと。

〔神鏡奉納寄付人〕 柏原学而 香川県 天保六年（明治四十三年）

高松藩医の家に生まれ、緒方洪庵に学び、一橋慶喜の侍医を勤める。

〔鏡背面銘〕聖跡第十八番 瀧宮天満宮 願主相原孝章

〔石碑文と揮毫〕聖跡廿五霊場之内第十八番瀧宮天満宮

裏面 明治十八年二月 福原 松本貫四郎 建之

〔由緒〕仁和二年正月十六日、菅公四二歳の時、讃岐の国司に任ぜられ、同年四月着任し、阿野南条郡瀧宮の官舎に住み給う。現在の神社の境内地は、その官舎跡と伝えている。着任後、国中を巡視し種々の業績を残されている。特に仁和四年の旱魃の際に自ら身命を賭して城山に登り断食七日七夜、降雨の祈願をして人民の困苦を救済した話はよく知られている。

第十九番

尾道御神社〔所在地〕広島県尾道市長江一丁目 おまつてんまんぐう 御袖天満宮

〔文〕備州因島へ御船をよせ、片袖をとりて桑原氏に玉ひしと。今それを尾の道に遷せしなりと。

〔神鏡奉納寄付人〕 松浦武四郎

〔鏡〕昭和四八年の火災により焼失した。

〔石碑文と揮毫〕聖跡廿五拜第十九番 御袖天満宮寶前 正四位山岡鐵太郎 拝書

〔揮毫〕山岡鐵太郎 号 鐵舟 江戸（東京都）天保七年（明治二十一年）

明治五年明治天皇の侍従となる。剣は無刀流を案出する  
書は一楽齋と号し、禪寺全生庵を建立している。

〔由緒〕大宰府へ左遷の途路、天神金屋の祖が麦飯と醸酒を供したところ菅公悦ばれ、自らの衣の袖を裁って御姿を描き与えたという。

第二十番 間島連影屋〔所在地〕広島県佐伯郡宮島町 天神社（厳島神社攝社）

〔文〕公御船をよせ一卷の連歌を奉納し玉ひし其古跡にして有しと。

〔神鏡奉納寄付人〕三田葆光 江戸 文政七年〜明治四十年 歌人

〔鏡〕存在不明

〔石碑文と揮毫〕聖跡二十番 連歌屋天満宮寶前 文揮毫石碑風化のため不明

〔由緒〕菅公が連歌を好まれ、当社で何度か楽しまれたという。

第二一番 周防宮市〔所在地〕山口県防府市松崎町十四・一 防府天満宮（防府天満宮）

〔文〕波郡なる宮市は、其比勝間の浦へ御船をよせ玉ひて順風を待玉ひし地にて松が崎と云う。

〔神鏡奉納寄付人〕 松浦武四郎

〔鏡背面銘〕聖跡廿一番 松崎天満宮 願主 松浦武四郎

〔石碑文と揮毫〕聖跡廿五拜第二十一番 松崎天満宮寶前 揮毫 不明

〔由緒〕菅公大宰府へ左遷の途路、船を勝間の浦におつけになった。公は時の周防の国司土師信貞と同族であった。公は酒垂山に登られ、山秀水麗の勝景を深く愛でられ、次の歌を詠まれ、家宝の金の鮎十二尾を国司に託されて淋しく旅立たれた。

身は筑紫にて果つるとも、魂魄は必ず此の地に帰り来らん

延喜三年二月二十五日、勝間の浦に神光が現れ、酒垂山に瑞雲が棚引き人々を驚かせた。それは菅原道真公の薨去の知らせであった。国司は早速宝殿を建立し御霊を鎮め松崎の社と号したのがこの神社の創始である。

第二番 博多綱場〔所在地〕福岡県博多市豊平区 綱敷天満宮（綱敷天満宮）

〔文〕前神の港に船より上らせ玉ふ時、船つなを敷て居え奉りしと。今の土居町の繩場の社其古跡なり。

〔神鏡奉納寄付人〕 松浦武四郎

〔鏡〕第二次世界大戦後存在不明になる

〔石碑〕第二次世界大戦後存在不明になる

〔由緒〕菅原道真公が袖湊から上陸されたとき、敷物がなかったので漁夫等が綱を輪にして差し上げたところと伝えられている。

きぬかけの松 其一〔所在地〕福岡県大宰府市国分 衣掛神社（衣掛神社）

〔文〕筑前国御笠郡雜餉隈驛に有て靈驗著し。

榎 寺 其二〔所在地〕福岡県大宰府市大宰府 榎寺（榎寺）

〔文〕従大宰府十八丁。公爰に居玉ひ終に薨御有しと。毎年八月の祭禮も此處まで神

幸ありしと。

去年今夜侍清涼 秋思詩篇獨斷腸

恩賜御衣今在此 捧持毎日拜餘香

天 拜 山 其二〔所在地〕福岡県筑紫市天拜山

〔文〕大宰府より一里にあり。罪なきを公天帝に訴へ玉ひしと。

第二三番 大宰府〔所在地〕福岡県大宰府市大宰府 大宰府天満宮だいさいふてんまんぐう

〔文〕なし 大宰府天満宮境内の本殿・摂社・末社等の名が記されている。

〔神鏡奉納寄付人〕 小野湖山 名は愿 滋賀県郷士 文化十年〜明治四十三年

三井寺の鍋塚の碑文を作書する。

〔鏡背面銘〕別記参照

〔石碑文と揮毫〕明治三十七年の火災で破損する。

聖跡廿五拜 大宰 寶前 が残り、中間部が欠損している。

〔由緒〕菅原道真公が延喜三年二月二五日五九才で榎寺で薨じられ、ご遺体は安楽寺

〔現在の大宰府天満宮本殿の場所〕に葬られ、延喜五年、門弟味酒安行によ

つて社殿が建立されたのが天満宮の創始である。

第二四番 播州上宮天神 〔所在地〕大阪府高槻市天神町 上宮天満宮じょうぐうてんまんぐう

〔文〕島上郡田邊村上宮は野見の郷にして、宿禰を祭りしが菅神贈官有て御帰洛の時

、神輿此處にて動かざれば一夜御留め奉りて都に御入有し故跡とて、往古より

祭り来る靈社なり。

〔神鏡奉納寄付人〕大鏡 別記参照

〔鏡背面銘〕大鏡 別記参照

〔石碑文と揮毫〕聖跡廿五拜第二十四番 土師里天満宮寶前はじのさと

従五位勲二等 加藤 濟謹書

〔由緒〕一条天皇の正暦四年勅使菅原朝臣、大宰府に行き、菅公の廟に参拝して贈左

大臣正一位の詔を伝え、帰路の途中ここで神輿が動かなくなり、一夜留まれ

京都に向かわれた。その後、里人が神殿を造営し、菅公御自筆の画像を奉齋

したことが神社の創祀となった。そして、京都北野社に先だつて祀られたの

で「上宮天満宮」と呼ばれるようになった。

第二五番 北野天満宮〔所在地〕京都市上京区御前通今出川馬喰町 北野天満宮きたのてんまんぐう

〔文〕天慶十年七條の文字、比良の良種等、託宣有て一夜に松一千本生ぜしより此處

へ始て造営有りしは即此處本り。

〔神鏡奉納寄付人〕 山田茂七

〔鏡背面銘〕大鏡 別記参照

〔石碑〕神社境内修復の際所在不明となる。

〔由緒〕菅公が九州大宰府の配所で没した後、京都ではいろんな災禍が起こりこれは菅公のたたりとして恐れられた。その後天慶五年に多治比文子に、また天曆元年に近江比良の神主良種の子供に神託があり、北野朝日寺の僧最珍に相談し、現在地に神殿を建立、天満天神を祀ったのが当社の起こりと伝える。

以上概略を述べたが、この双六を作成するについては松浦武四郎の豊富な知識と壮大な実践力、深い天神信仰、そして周到な準備の上からの賜物であろう。

双六は菅原道真公の生涯を系統的に配列されている。主に菅公が左遷されて大宰府へ西下される途路の神社を順次訪ね、その中で、第一番菅原院天神、第六番与喜山天満宮、第七番威徳天満宮、第十八番瀧宮天神の四神社についてはその趣を異にしている。その点よく検討、吟味の上作成されていることに頭が下がる。

## 連歌

與喜天満宮といえは天神講連歌会といわれる程、その道の人にはよく知られていた。そして長谷寺第二十四世能化信怒僧正（就任 延享三年、宝暦十年 一六八五—一七六三）が描かせた與喜天満宮祭礼図には、その左上に連歌会の様子が描かれている。それは與喜天満宮、秋の例祭当日に本殿の横に建てられていた菅明院での連歌会である。床に菅原道真公の御影を掲げ、正面に長谷寺能化が座し、執筆者と長谷寺六坊主と連歌衆が座している図である。従ってこの頃には盛んに連歌の会が催されていたことが伺える。

初瀬の連歌はいつ頃から始まったかは詳ではないが、鎌倉時代末期頃のようにある。それは南北朝時代の摂政二条良基が書いた『連歌新式』を、関白一条兼良が加筆して『連歌新式并追加今案等』を書いた。その『連歌新式并追加今案等』を長谷寺が興福寺別当で大乗院門主、撰家九条家出身の経覚大僧正に写書を依頼したその物が長谷寺の宗宝蔵に保管されている。この末尾に応仁二年（一四六八年）の記銘がある。

この連歌新式について京都大学岡見正雄教授が長谷寺に寄せられた文の一部を故岡田円師僧正が寄稿された豊山学報に掲載されているものを引用したい。

『この連歌新式について注意したいのは、これが長谷寺付属の「鎮守聖廟」の連歌を

やるために仕立てられたのであり、人々はこの連歌新式を見て法則を守りながら、鎮守の天神様の前で連歌をしたと考えられる。一昧、古来歌枕として有名な初瀬の寺の鎮守たる天神社は、北野天神社よりも先に鎮座しましたという言い伝えであり、この天神様には、最近まで連歌が長谷寺の寺中より奉納されたということであり、この社が寺に依って尊ばれ、歌の神たる天神に奉納するために、室町時代に盛んに連歌が行われたのであろうことは想像に難くない。殊に室町時代盛んに連歌師がこの土地に寄っているのは、恐らく天神の縁によってであらうと考えられ、就中、芸能人として有名な足利將軍の同朋衆「能阿弥」の如きは、文明三年に当寺に來って死んだらしく、能阿弥は絵画に達者であったが、連歌にも亦名人であって、殊に旅の連歌をよく読み、天神を深く信仰していたらしい。従って長谷寺で死んだことは、いかにもふさわしいように思われ、且つこの連歌新式四幅を前にして、與喜天神社の前で連歌の興行に加ったことがあるかも知れない。』以下略

こうした連歌も乱れた世のさわがしさに與喜天神の連歌献詠も絶えたようであったが、長谷寺第九世能化頼意僧正（就任 寛文六年〜延宝三年 一六六六〜一六七五）が復興され、以後毎月二十日には長谷寺一山の僧衆が初瀬川古河野辺の清流に架けられた「連歌橋」を渡って與喜天神社へ出仕し、菅明院で月々百歌の奉納がされていた。また文政四年頃

、天下一の連歌師と謳われた無相阿闍梨（宝曆七年〜文政八年 一七五七〜一八二五）と深交のあった塙保巳一検校（延享三年〜文政三年 一七四六〜一八二〇）が無相阿闍梨に寛永年中の連歌三百韻の懷紙を贈っている。こうして室町時代から江戸時代にかけて、與喜天神を中心として初瀬の地は連歌盛行地であったようである。これも明治維新の神仏分離の政策により與喜天満神社の管理運営方法が変わったために天神講連歌会も姿を消してしまった。

與喜天神社の連歌詠草は悪い状態ではあったが数箱が保存されていた。しかし残念乍ら散逸してしまい、残っていた二箱の詠草はシミが食い、鼠がはいり、また湿気のためにコシクリート状となってしまうて資料としての価値は無くなってしまっていたが、平成五年二月に長谷寺宗宝蔵で保管されることになったので、いつの日か最悪の状態の連歌詠草を解きほぐし、調査のできる機会を期待したい。

幸い、岡田果師僧正が昭和三十年の調査された中で元号の判明されたものは、延宝、元禄、宝永、正徳、享保、元文、寛保、寛延、安永、天明、寛政、文化、文政、天保、と続き一六七〇年頃から一八四〇年の約百七十年間の沢山の詠草があったことが偲ばれる。又、地方の連歌衆が天神連歌会に参集し與喜天満神社に石燈籠が二対献納されている。

(與喜天満神社境内石造物の項参照)

このように消えてしまった連歌会を再興しようとする動きがあり、一日でも早くその実現を希望したい。

## 長谷寺縁起

長谷寺縁起については與喜天満神社と直接関係はないと思うが、一応触れておきたい。

長谷寺縁起は数種作成されているが、その中で、承應元年(一六五二年)十二月の奥書をもつ奈良県指定有形文化財の縁起絵巻の巻頭に「寛平八年(八九六年)二月十日依勅菅丞相の勸出せしめ給ふ長谷寺の縁起にいはいはく……後略」とあるように、菅原道真は長谷寺十一面観世音菩薩を信仰されているとき、宇多天皇から左大臣藤原良世が勅命をうけ撰進したものを大納言菅原道真公が執筆したとされている。

こうして出来た長谷寺縁起を松浦武四郎は聖跡廿五霊社順拝双六の第六番長谷与喜山にとりあげ、その説明文に「公は当寺の観音を御信仰ありてその縁起をも認め玉いしなり」と記している。

この菅原道真公が執筆された長谷寺縁起は、長谷寺の歴史を語る最高の資料である。

### 参考資料

- 桜井市史 奈良県桜井市役所 昭和五十四年十一月三日  
郷土 桜井文化叢書第二冊 奈良県桜井市役所 昭和三十六年三月二十五日  
西国三十三所名所図会 暁 鐘成 臨川書店 平成三年四月三十日  
大和名所図会 秋里籬島 歴史図書社 昭和四十六年一月三十日  
都名所図会 秋里籬島 大日本名所図会刊行会 大正七年十二月五日  
豊山学報 四・五号 豊山宗研修所 昭和三十四年二月・三月  
豊山前史 真言宗豊山派総本山長谷寺 昭和三十八年五月十八日  
室生寺及び長谷寺の研究 遠日出典 京都精華学園 昭和四十五年三月三十一日  
和州祭禮記 辻本好孝 天理時報社 昭和十九年三月二十日  
長谷寺 藪田嘉一郎 著 真言宗豊山派総本山長谷寺 昭和四十五年三月十五日  
長谷・多武峯 近畿日本鉄道 近畿文化会 昭和四十五年七月一日  
豊山長谷寺拾遺第一輯 絵画 総本山長谷寺文化財等保存調査委員会 平成六年五月二十日  
長谷寺名宝展図録 真言宗豊山派総本山長谷寺 平成四年七月  
長谷寺一観音の祈り 総本山長谷寺 平成四年四月一日  
日本人名大辞典 平凡社編 昭和五十四年  
明治維新人名辞典 吉川弘文社編 昭和五十六年九月一日  
松浦武四郎『聖跡廿五霊社順拝双六』 梅原達治 リベラル・アーツ創刊号抜刷  
松浦武四郎記念館図録 松浦武四郎記念館 平成八年二月二十日  
松浦武四郎広報みくも掲載集約集 三雲町役場 昭和六三年四月〜平成五年三月  
北海道の名付け親 松浦武四郎の生涯 三雲町役場 平成四年三月三十日  
松浦武四郎紀行集 中 吉田武三 富山房 昭和五十年十二月  
百科辞典 平凡社 昭和二十七年十月一日  
連歌「座」の文学 松山市立子規記念博物館 昭和六三年十一月一日  
各神社葉

あとがき

與喜天満神社は古く旧郷社として広域に深く信仰されていたが、第二次世界大戦で敗北し、世相は一変し、宗教面の変革は大きかった。與喜天満神社も初瀬、吉隠、角柄、白河、小夫、芹井、白木、萱森、三谷、修理枝、和田、安田、狛、岩坂、出雲の十五ヶ大字の住民が氏子であったが、今はどうしたことが初瀬地区の住民だけの氏子となってしまっている。原因はともあれ、靈驗あらたかな與喜天満神社への敬神の念を呼び戻してもらいたいものである。

このようなことで神社には残念ながら歴史等を知る資料はなく、真言宗豊山派総本山長谷寺に保存されている古文書等を頼りに調べるしか方法はない。そこで一応ここでまとめ、以後一層深く天神信仰、長谷寺と與喜天満神社との関係、連歌・文学と初瀬等研究を進めたく思っている。各位の御助言、御指導を賜れば幸甚です。

この書をまとめるについて、各神社、松浦武四郎記念館の職員の方々にお世話になり、長谷寺文化財調査室長の甲田弘明氏に種々ご教示を賜ったことに感謝致します。

土井 正

與喜天満神社

発行日 平成九年九月一日

編集・発行 土井 正

奈良県桜井市初瀬四三五〇  
電話〇七四四・四七・七一七七

印刷 株式会社 中西文山堂

奈良県橿原市今井町三丁目三二一

與喜天満神社 正誤表

頁	誤	正
六 二行目	倭姫 <small>（まゝ）</small>	倭姫 <small>（まゝ）</small>
十三 七行目	遷 <small>（り）</small> された	遷 <small>（る）</small> された
四一 十五行目	石燈籠（三）	石燈籠（3）
四二 十一行目	この九・十の	この9・10の
四四 十二行目	前記十三	前記13
四五 三行目	十五石燈籠	15石燈籠
四七 一行目	石碑（三）	石碑（3）
七九 十三行目	岡田月師 <small>（おきたつきし）</small>	岡田泉師 <small>（おきたいみ）</small>



# 与善天湯神社

資料編

土井正

# 目次

西国三十三ヶ所観音霊場	1
與喜天満神社境内の変遷	10
隔夜堂	14
天照大神御霊の御遷幸	15
鍋倉神社	22
御神像の修理	25
小神像	30
天満宮木造座像	31
拝殿	32
神輿と神輿渡御巡幸の変遷	34
松浦武四郎の與喜天満神社へ神鏡の献納	45
あとがき	55

#### 西国三十三ヶ所観音霊場

西国三十三ヶ所観音霊場巡礼が一般に行われるようになったのは、室町時代からとされているが、その起源については定かではない。

八世紀のはじめ、大和長谷寺にゆかりのある徳道上人が病のために仮死状態になったとき、閻魔大王から三十三の宝印を与えられて仮死状態から解放された。そこで上人は近畿地方の寺院の中から三十三の霊場を設け信仰を広めようとしたが、世間の人々はこのことを信じなかった。上人はやむなく宝印を中山寺に埋めた。それから約二百七十年後の永延二年（九八八年）花山法皇がこの宝印を堀り出し、河内国石川寺の仏眼上人のすすめによって、性空上人・弁光僧正を供にして最初に紀伊国那智山に参詣を済まし、紀伊（和歌山県）、和泉・河内・摂津（大阪府）、大和（奈良県）、山城・丹波・丹後（京都府）、播磨（兵庫県）、近江（滋賀県）と進められ、最後に美濃（岐阜県）の谷汲山で順拝を終えられた。その後、これにならって巡礼が広まっていったという。

その後、室町時代末期ころから伊勢信仰が広まってきた。こうした時、東海・関東地方から西国三十三ヶ所観音霊場札所を巡礼する人々は、当然伊勢神宮を参拝して行くことになるから伊勢信仰と西国三十三ヶ所観音霊場信仰とが並行して発展していったと考える。

従つて西国三十三ヶ所観音霊場巡礼は、まず伊勢神宮の内宮・外宮を参拝し、伊勢朝熊山金剛証寺の参詣を済まし、紀州那智山青岸渡寺から順次巡礼していったようである。嘉永元年戊申三月（一八四八年）に曉鐘成が書いた『西国三十三ヶ所名所図会』の巻頭の凡例に「世に西国巡礼と称する事は往昔東国の人霊場を巡るに道の便宜に伊勢両宮に詣で而して熊野に至り漸に国々を経て美濃路に終り故郷の吾妻に帰る順路よりして斯は号け始しとぞ依て古例にもとずきて伊勢を発端とす」と記している。

日本仏教の山岳修験者、天台宗、真言宗等の高僧の間では、各地に散在する修行の場所を求めて遍歴する者が多かった。花山法皇もそのような人達の一人だったのかもしれない。しかし花山法皇の時代には観音霊場としての三十三ヶ所寺院はまだ確定はしていなかった。ただ西国三十三ヶ所札所巡拝の創始者として、法皇に従つて巡拝した書写山性空上人、河内の仏眼上人、弁光僧正、良重、祐懐らが巡礼の順路を考案したとの説もあるが、法皇が那智山を第一番に参詣されたことに準じて現在の参詣順路が作られたようである。

後世の記録によると、その巡路の寺院はほぼ同じであるが、順路に少々の変化がある。これも全行程を無駄なく済ませようとしたことから生まれたことであろう。ただ後醍醐天皇妃、中宮恂子内親王御安産祈願のために三十三ヶ所の観音霊場に誦経を命ぜられた時の霊

場は少々異なっている。

前大僧正 行尊 編 保延元年（一一三五年）乙卯 第一番 長谷寺

長谷 僧正 編 久安六年（一一五〇年）庚午 第一番 那智如意輪堂

三井寺前大僧正覚忠 編 応保元年（一一六一年）辛巳 第一番 那智山

中宮恂子内親王安産祈願 建武二年（一一三三五年）乙亥 第一番 成相山

現 代 室町時代 第一番 那智山青岸渡寺

花山法皇：十九才で出家、比叡山で修行、書写山で性空上人の教えを受ける。

熊野・那智・粉河寺に参詣し、名僧から教えを受け、諸寺諸仏を

遍歴順拝し、自ら修行の場を求めていかれた。第六十五代天皇

徳道上人：齐明天皇二年丙辰（六五六）九月十八日播磨国揖保郡矢田部で誕生

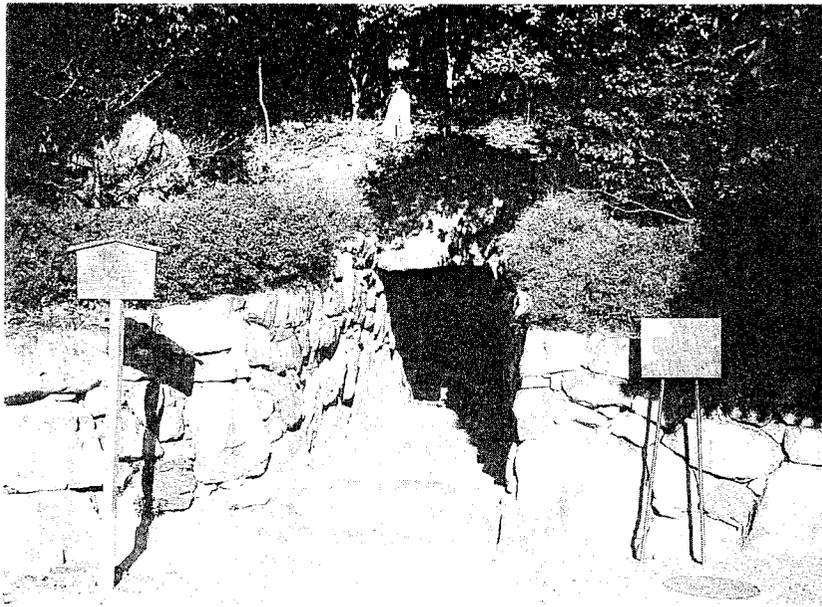
十一面観世音菩薩を本尊とする長谷寺を建立。神龜四年（七二七）

入寂年には三通りの説がある。

天平元年己巳十二月十二日 七十四歳（清光寺縁起）

天平十九年丁亥十二月十二日 九十二歳（矢田部村記録）

天平宝字六年壬寅二月二日 一〇七歳（豊山玉石集）



白鳥古墳石室入り口



白鳥古墳玄室と石棺

徳道上人が閻魔大王から授けられた宝印を中山寺に埋めたとされる場所は、兵庫県宝塚市、西国三十三霊場第二十四番札所、紫雲山中山寺の本堂の西、聖徳太子が仲哀天皇の先の皇后大仲媛とその子、忍熊皇子の霊を祀った白鳥塚古墳とされている。

中山寺は現在の北の山中にあったが、寿永年間（一一八二年頃）と天正年間（一五七八年頃）の二度の兵火のために焼失し、その後、豊臣秀頼の命で片桐且元が現在地に再建した。そのためか、白鳥塚古墳の形状が不鮮明となり、円墳とも方墳ともいわれているが、差し渡しが約二五mと考えられている。石室は横穴の両袖式で玄室の長さ六m、幅二・五m、高さ三m。羨道の長さ九m、幅二m、高さ二・五mで、玄室の奥には高さ一・五mで縄掛突起を六つ持つ家形石棺が置かれている。

西国三十三ヶ所観音霊場の変遷

札番	現代	行尊僧正編	長谷僧正編	覚忠僧正編	恂子内親王
一	青岸渡寺	長谷寺	如意輪堂 <small>齋田</small>	那智山	成相寺
二	金剛宝寺	岡寺 <small>蓋龍寺</small>	那智千手堂	金剛宝寺	観音正寺
三	粉河寺	南法華寺	金剛宝寺	粉河寺	近江袋懸*
四	施福寺	粉河寺	粉河寺	南法華寺	石山寺
五	葛井寺	金剛宝寺	施福寺	龍蓋寺	穴太寺
六	南法華寺	如意輪堂 <small>齋田</small>	南法華寺	長谷寺	法性寺 <small>観音*</small>
七	岡寺 <small>蓋龍寺</small>	模尾寺	岡寺 <small>龍蓋寺</small>	南円堂	谷波山
八	長谷寺	剛林寺	長谷寺	施福寺	紀三井寺
九	南円堂	総持寺	南円堂	剛林寺	那智如意輪寺
十	三室戸寺	勝尾寺	准胝堂 <small>上齋田</small>	総持寺	模尾寺
十一	上醍醐寺	仲山寺	正法寺	勝尾寺	粉河寺
十二	正法寺	清水寺	石山寺	仲山寺	行願寺
十三	石山寺	法華寺	如意輪堂 <small>齋田</small>	清水寺	播磨清水寺
十四	三井寺	如意輪堂 <small>齋田</small>	六角堂	法華寺	中山寺
十五	観音寺	成相寺	清水寺	書写山	神呪寺*
十六	清水寺	松尾寺	行願寺	成相寺	吉峰寺
十七	六波羅密寺	竹生島	六波羅密寺	松尾寺	河崎感心寺*

十八	六角堂	谷波寺	観音寺	竹生島	清水寺
十九	行願寺	観音正寺	穴太寺	谷波寺	六波羅密寺
二十	善峰寺	長命寺	良峰寺	観音正寺	六角堂
廿一	穴太寺	如意輪堂 <small>齋田</small>	総持寺	長命寺	興福寺南円堂
廿二	総持寺	石山寺	勝尾寺	如意輪堂 <small>齋田</small>	西円堂*
廿三	勝尾寺	正法寺	仲山寺	石山寺	勝尾寺
廿四	中山寺	醍醐寺	清水寺	岩間寺	総持寺
廿五	清水寺	観音寺	法華寺	上醍醐	齋如意輪堂*
廿六	乗寺	六波羅	如意輪堂 <small>齋田</small>	東山観音堂	岩間寺
廿七	円教寺	清水寺	成相寺	六波羅密寺	穴太寺 <small>法華堂*</small>
廿八	成相寺	六角堂	松尾寺	清水寺	元興寺*
廿九	松尾寺	行願寺	竹生島	六角堂	長谷寺
三十	宝蔵寺	善峰寺	華蔵寺	谷波	行願寺
三十一	長命寺	菩提寺	観音寺	善峰寺	龍蓋寺
三十二	観音正寺	南円堂	長命寺	菩提寺	穴太寺 <small>金堂*</small>
三十三	華蔵寺	千手堂 <small>御堂</small>	御室戸寺	御室戸寺	欠

恂子内親王欄の\*印は現在の西国札所寺院でない寺院を示す。

\*寺院が加入したために現在の札所から除かれた寺院

- ・南法華寺・三室戸寺・醍醐寺・三井寺・観音寺・乗寺・円教寺・松尾寺・
- ・宝蔵寺・長命寺

西国三十三ヶ所観音霊場（現代）

番	山号	寺名	所	在	地	本尊
一	那智山	青岸渡寺	和歌山県	東牟婁郡	那智勝浦	如意輪観音
二	紀三井山	金剛寺護国院	和歌山県	和歌山市	紀三井寺町	千手観音
三	風猛山	粉河寺	和歌山県	那賀郡	粉河町	千手観音
四	槇尾山	施福寺	大阪府	和泉市	槇尾山町	千手観音
五	紫雲山	葛井寺	大阪府	藤井寺市	藤井寺	千手観音
六	壺坂山	南法華寺	奈良県	高市郡	高取町 壺坂	如意輪観音
七	東光山	岡寺蓋龍寺	奈良県	高市郡	明日香村 岡	十一面観音
八	豊山	長谷寺	奈良県	桜井市	初瀬	徳道上人
外	豊山	法起院	奈良県	桜井市	初瀬	不空羼索観音
九	興福寺	南円堂	奈良市	上大路町		千手観音
十	明星山	三室戸寺	京都府	宇治市	三室戸	千手観音
十一	深雪山	上醍醐寺	京都市	伏見区	醍醐山町	准胝観音
十二	岩間山	正法寺	滋賀県	大津市	石山内畑町	千手観音
十三	石光山	石山寺	滋賀県	大津市	石山寺	如意輪観音
十四	長等山	三井寺	滋賀県	大津市	園城寺町	如意輪観音
外	華頂山	元慶寺	京都市	東山区	山科北花山河原町	葉師如来
十五	新那智山	観音寺	京都市	東山区	今熊野泉涌寺山内町	十一面観音

十六	音羽山	清水寺	京都市	東山区	清水一丁目	十一面観音
十七	補陀落山	六波羅密寺	京都市	東山区	松原通大和大路東入る	十一面観音
十八	紫雲山	頂法寺六角堂	京都市	中京区	六角通烏丸東入る	如意輪観音
十九	靈鹿山	革堂行願寺	京都市	中京区	寺町通竹屋町	千手観音
二十	西山	善峰寺	京都市	西京区	大原野小塩町	千手観音
廿一	菩提山	穴太寺	京都府	亀岡市	曾我部町穴太	聖観音
廿二	補陀落山	総持寺	大阪府	茨木市	総持寺	千手観音
廿三	応頂山	勝尾寺	大阪府	箕面市	粟生町	十一面観音
廿四	紫雲山	中山寺	兵庫県	宝塚市	中山寺	十一面観音
外	東光山	花山院菩提寺	兵庫県	三田市	尼寺	葉師 璽光如来
廿五	御嶽山	清水寺	兵庫県	加東郡	社町平木	千手観音
廿六	法華山	一乗寺	兵庫県	加西郡	坂本町法華山	聖観音
廿七	書写山	円教寺	兵庫県	姫路市	書写	如意輪観音
廿八	成相山	成相寺	京都府	宮津市	成相山	聖観音
廿九	青葉山	松尾寺	京都府	舞鶴市	松尾	馬頭観音
三十	竹生島	宝蔵寺	滋賀県	東浅井郡	びわ町	千手観音
三一	姨綺耶山	長命寺	滋賀県	近江八幡市	長命寺町	千手観音
三二	織山	観音正寺	滋賀県	蒲生郡	安土町石寺	千手観音
三三	谷汲山	華厳寺	岐阜県	揖斐郡	谷汲村徳積	十一面観音

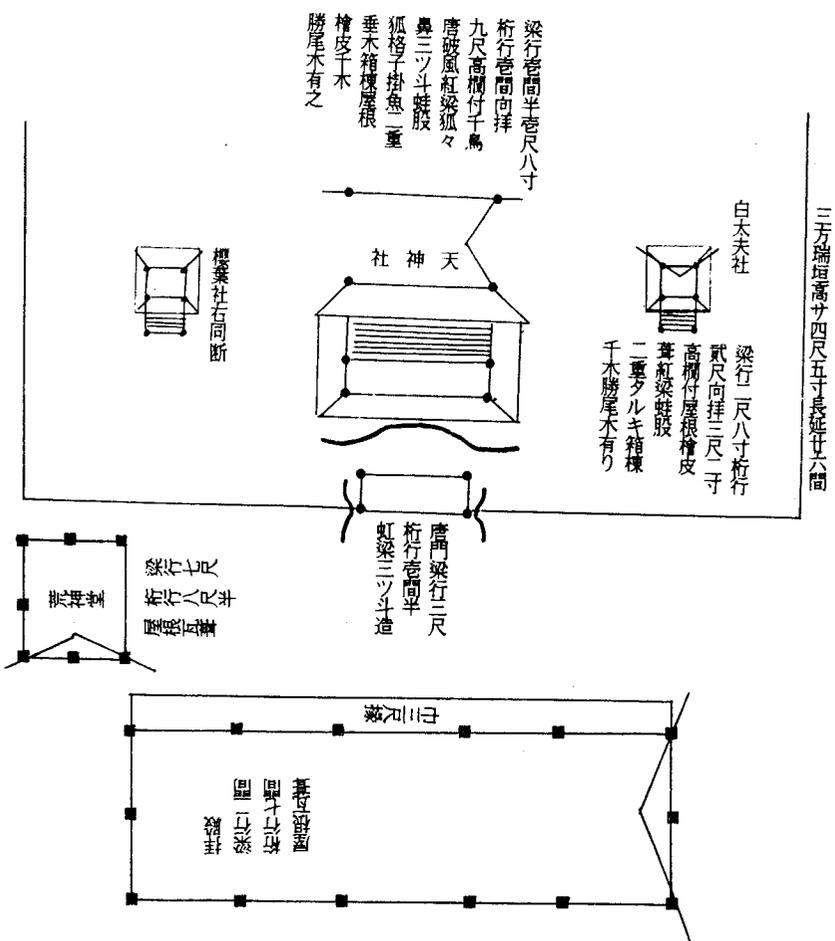
與喜天満神社境内の変遷

本誌では與喜天満神社境内の様子が明治初期に実施された神仏分離令による鹿仏棄積のために変化したことを述べたが、本誌発行後に出てきた資料により再検討した。

本誌二頁の境内図（享和年間一八〇〇年頃書）の本殿・拜殿の部分を拡大して図示した。この図は建物夫々の大きさと、様相が記載されている。そして、本殿を挟んで一社ずつ向かって右に白太夫社、左に桜葉社が描かれている。

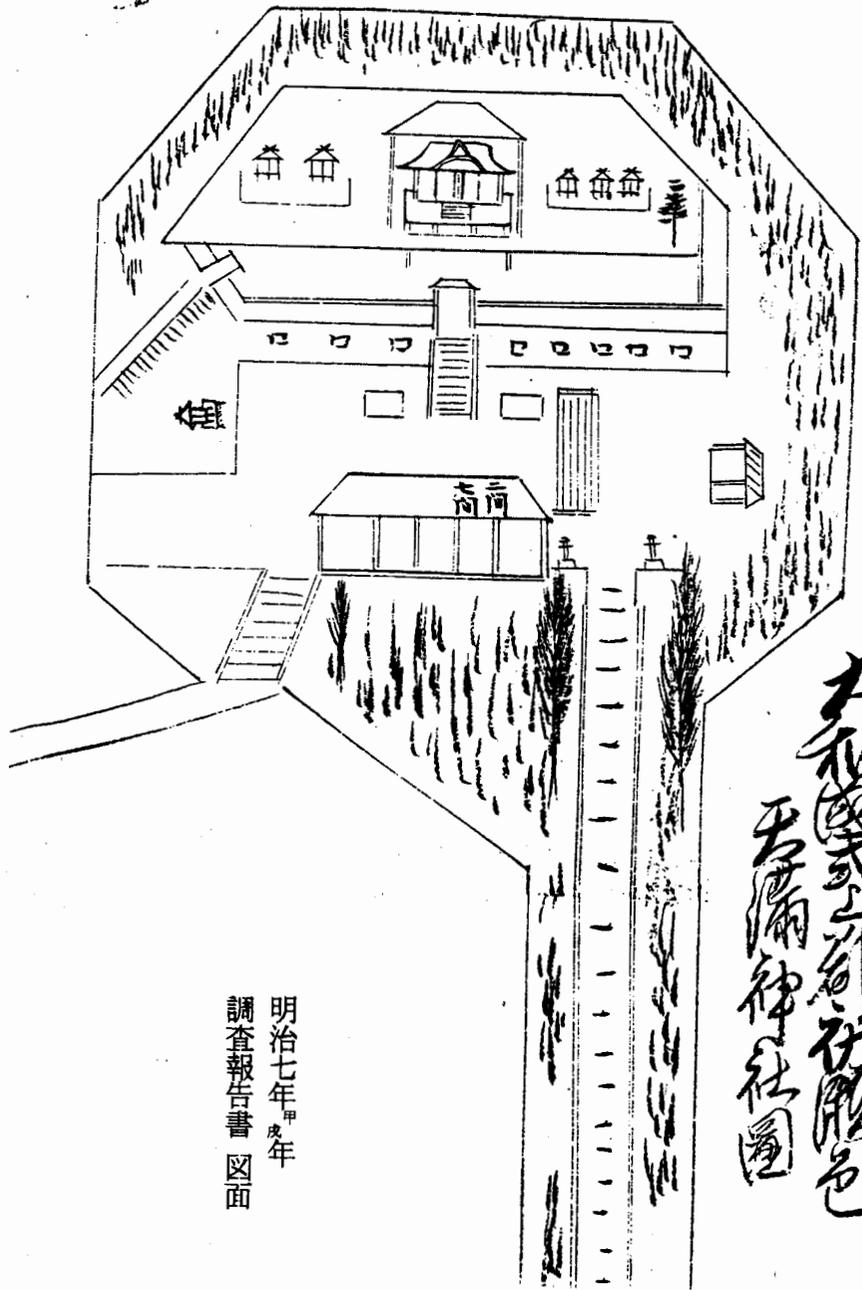
又、嘉永元年（一八四八年）あかつきしょうせい 晁鐘成が編集した「西国三十三ヶ所名所図会」の與喜山天神聖廟と題した境内図でも、前図と同様に本殿を挟んで一社ずつが描かれている。

ところが、明治七年（一八七四年）に社司が書いた調査報告書の絵図では、前図二葉と大きく異なり、本殿の右に三社、左に二社が描かれ何の書き込みもない。これは明治初期の神仏分離令のため長谷寺本堂横に鎮座されていた瀧蔵権現三社を與喜天満神社の境内に遷座せられたのである。そのため現在のように本殿を挟んで右に瀧蔵権現三社、そして左に白太夫社、桜葉社が鎮座された。そしてこの境内図にはどうしたことが、八王子社が描かれていない。



享和年間に描かれた長谷寺境内建物図の  
與喜天満神社本殿・拜殿部分

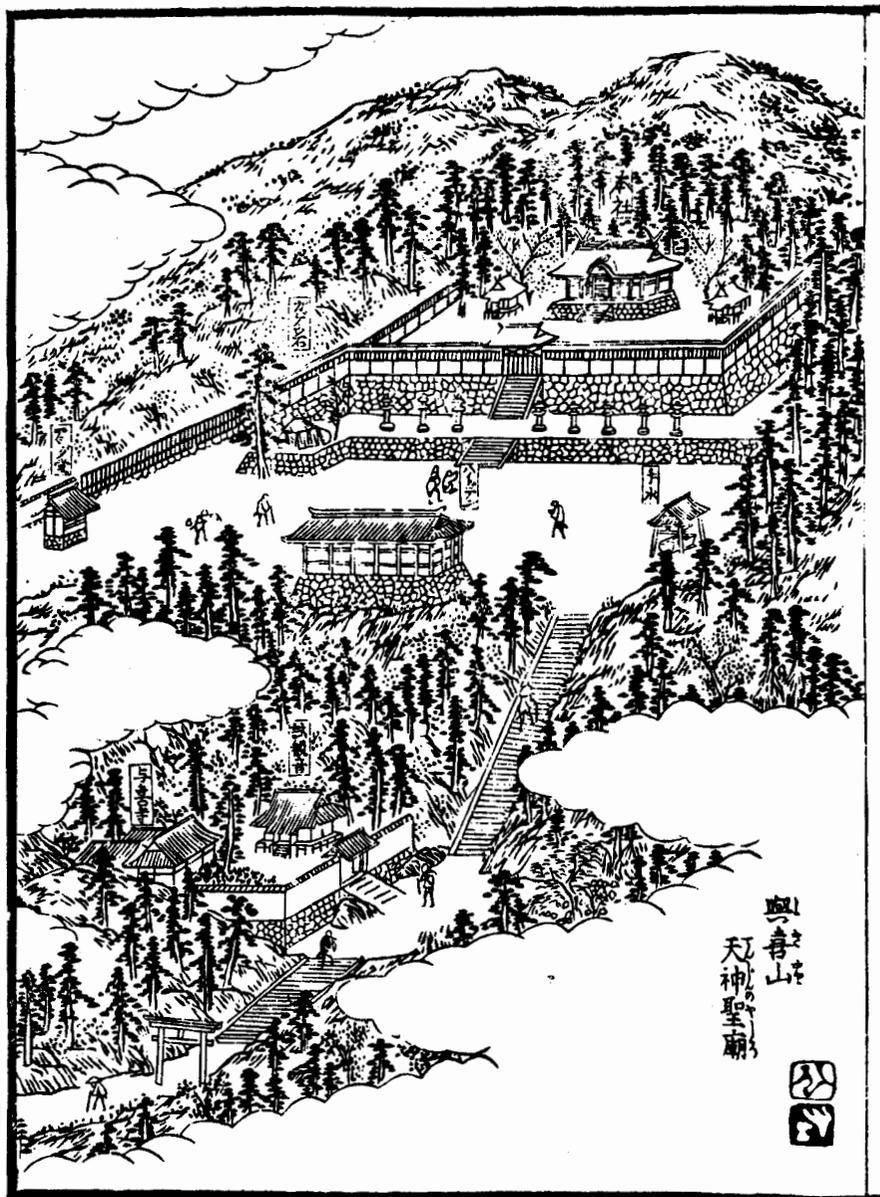
この図の書き込みは毛筆行書で  
あるために書き替えた



大和國式部初鹿色  
 玉瀨神社圖

明治七年甲戌年  
 調查報告書 圖面

西國三十三所名所圖會



與喜山  
 天神聖廟



西八五十六

## 隔夜堂（本誌二頁）

長谷寺蔵の豊山玉石集に隔夜堂について次のように記されている。

与喜寺の下にあり。洛東六波羅密寺開山空也上人当山に籠り、観音の御告に依りて前世に調ひ置き玉ひし大般若經の軸を尋ね玉ひて、信心弥増し、南都春日宮より当山へ千日参詣の願を立て、南都に一夜、初瀬に一夜、夜を隔てて宿り、三年三月の間、念仏の弘通を祈らせ給ひける其旅宿なり。かほどに深き上人の御志なれば大悲者何ぞ納受し給はざらん。心の俣に念仏を弘め給ひけり、夫より隔夜と名すけて春日より初瀬まで上人の跡を続け、千日を限りて往返参詣する者、三、四人ずつ今に至るまで絶えず。是又上入度生の志を感じて大悲者擁護をたれ玉ふ故なるべし。春日の側にも此堂有り云々。

このように初瀬と春日の客養寺とを往復する修行僧を隔夜僧といい、こもつて宿泊した堂を隔夜堂と呼んだ。隔夜僧は毎日休むこともなく白い股引に脚絆、白衣の上に黒衣を着て、蓮の花笠を被り、胸に掛けた鐘を鳴らし念仏を唱えながら歩き修行を続けた。時には道筋の人達の手紙などをこつとすかることもあったと云う。そして隔夜僧達の修行は大正時代初期まで続けられていた。

## 天照大神御霊の御遷幸

崇神天皇の皇女豊鋤入姫命が御杖代として、天照大神の御霊の安息の地をもとめて大和笠縫邑を出発されて約五十四年、その後を引き継がれて垂仁天皇の皇女倭姫命が御杖代として適当な場所を求めて約四十年の長期間を費やして伊勢の地に鎮座された。

そこで、伊勢神宮が現在地に鎮座されるについて、奈良県桜井市初瀬に伝えられている「伊豆加志本宮」との関連について知りたく思っていた。幸いそれに関した資料として、伊勢神宮より倭姫命記をはじめ幾種類もの資料を照会して下さり、関係市町村役場から頂戴した資料を元にして、昭和五七年からそれぞれの遺跡を訪ねる準備と計画をたて、昭和六十・六一年に遺跡（殆どが神社）になっている。（を訪ねた。

最初は地元の奈良県桜井市三輪の笠縫邑（松原神社付近）から始め、続いて京都府加佐郡大江町官山に鎮座される元伊勢皇大神社へ参拝した。この後、御霊御遷幸の場所について異説のある所も含めて順拝していった。神社の建て方は殆どが伊勢神宮によく似た建て方であった。ただこの中で、坂田宮（滋賀県近江町岡神社）の境内をJR北陸本線が横切り、また飯野高宮（三重県松阪市神山神社）では参道をJR参宮線が横切っていた。当時の社会情勢のためだっただろうが、何かわびしい思いがした。

『日本書紀』

崇神天皇 六年

天照大神・倭大國魂二神、並祭於天皇大殿之内。然畏其神勢、共住不安。故以天照大神、託豐鋤入姬命、祭於倭立縫邑。仍立磯堅城神籬。

垂仁天皇二十五年三月丁亥朔丙申、離天照大神於豐稻入姬命、託于倭姬命。爰倭姬命求鎮坐大神之処上、而詣菟田筱幡。筱、此云佐佐。更遷之入近江國、東廻美濃、到伊勢國。

二十六年 時天照大神誨倭姬命曰、是神風伊勢國、則常世之浪重浪歸國也。傍國可怡國也。欲居是國。故隨大神教、其祠立於伊勢國。因興齋宮于五十鈴川上。是謂磯宮。則天照大神始自天降之処也。

『倭姬命記』 抜粹

御間城入彦五十瓊殖天皇即位六年己丑秋九月。就於倭立縫邑。殊立磯城神籬。奉遷天照大神及草薙劍。令皇女豐鋤入姬命奉齋焉。

(御間城入彦五十瓊殖天皇崇神天皇)

崇神天皇三十九年壬戌 遷幸但波乃吉佐宮。積四年奉齋。

崇神天皇四十二年丙寅 遷倭國伊豆加志本宮。八年奉齋。

崇神天皇五十一年甲戌 遷木乃國奈久佐濱宮。積八年之間奉齋。

崇神天皇五十四年甲戌 遷木乃國奈方濱宮。積三年之間奉齋。

崇神天皇五十八年辛巳 遷倭美和之御室嶺上宮。二年奉齋。是時。豐鋤入姬命吾日足止白。爾時。姪倭比売命事依奉。御杖代定。從此倭姬命奉戴天照大神而行幸。

神而行幸。

崇神天皇六十年癸未

遷于大和國宇多秋宮。積四箇年之間奉齋。

中略 從于宇多秋宮

幸行而。佐々波多宮座焉。

崇神天皇六四年丁亥 遷幸伊賀国隱市守宮。二年奉齋矣。

崇神天皇六十六年己丑 遷幸同国穴穗宮。積四年奉齋。

活目入彦五十狹茅天皇即位一年癸巳。遷幸伊賀国敢都美惠宮。三年奉齋矣。

(活目入彦五十狹茅天皇 垂仁天皇)

垂仁天皇 四年乙未 遷淡海甲可日雲宮。四年奉齋。

垂仁天皇 八年己亥 遷幸同国坂田宮。二年奉齋。

垂仁天皇 十年癸丑 遷幸美濃国伊久良河宮。四年奉齋。次遷幸尾張国中島宮座。

垂仁天皇十四年乙巳 遷幸于伊勢国桑名野代宮。四年奉齋。

垂仁天皇十八年己酉 遷坐于阿佐加藤方片樋宮。積年曆一箇年奉齋。

垂仁天皇廿二年癸丑 遷飯野高宮。四箇年奉齋。

垂仁天皇廿五年丙辰 從飯野高宮遷幸于伊蘇宮。令坐。

天照大神御靈御遷幸の宮と奉齋期間

御杖代 豐鋤入姫命

一、笠縫邑 崇神天皇 六年己丑 三三年 奈良県桜井市三輪

二、吉佐宮 (元伊勢皇太神宮) 三九年壬戌 四年 京都府加佐郡大江町宮山

三、伊豆加志本宮 四三年丙寅 八年 奈良県桜井市初瀬

四、奈久佐浜宮 (浜之宮) 五一年甲戌 三年 和歌山県海南市毛見

五、名方浜宮 五四年丁丑 四年 和歌山県海南市高浜

六、美和之御室嶺上宮 五八年辛巳 二年 奈良県桜井市三輪

御杖代 倭姫命

七、阿紀宮 (阿紀神社) 崇神天皇六十年癸未 四年 奈良県宇陀郡大宇陀町迫間

八、佐佐波多宮 (篠畑神社) 六四年丁亥 二年 奈良県宇陀郡榛原町山辺三

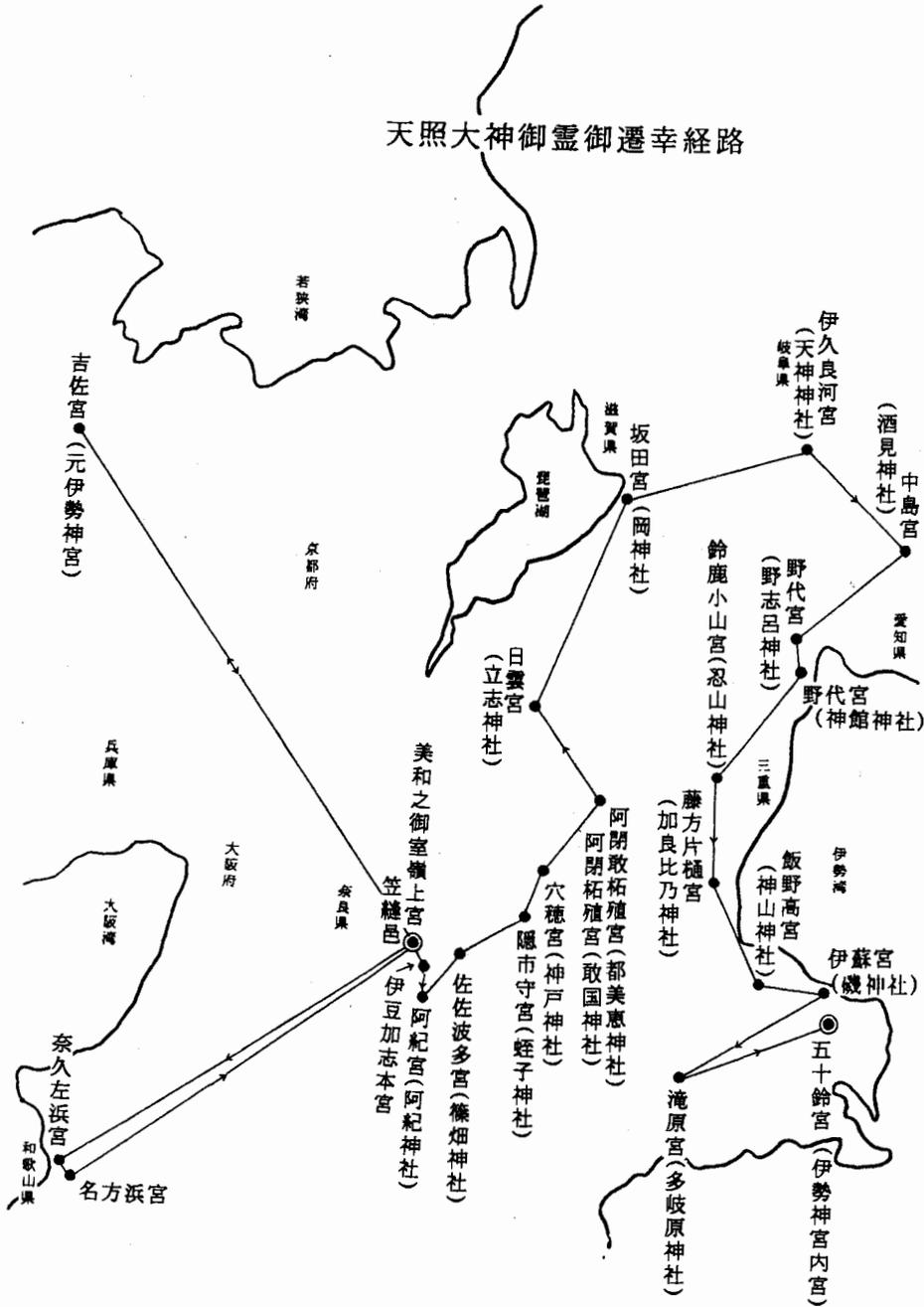
九、隱市守宮 (蛭子神社) 六六年己丑 四年 三重県名張市鍛冶町

十、穴穗宮 (神戸神社) 二重県上野市上神戸

十一、阿閉柘植宮 (敢国神社) 垂仁天皇 二年癸巳 二重県上野市一之宮

十二、(都美惠神社) 二年 三重県阿山郡伊賀町上柘植

天照大神御靈御遷幸経路



三、日雲宮	(立志神社)	四年乙未	四年	滋賀県甲賀郡甲西町三雲
三、坂田宮	(岡神社)	八年己亥	二年	滋賀県坂田郡近江町宇賀野
二、伊久良河宮	(天神神社)	十年辛丑	四年	岐阜県本巣郡南町居倉
去、中島宮	(酒見神社)			愛知県一宮市伊勢町本神戸
去、野代宮	(野志呂神社)	十四年乙巳	四年	三重県桑名市多度町下野代
去、鈴鹿小山宮	(忍山神社)	十八年己酉	六月	三重県桑名市江場神戸
去、藤方片樋宮	(加良比乃神社)	十八年己酉	四年	三重県亀山市布気
去、飯野高宮	(神山神社)	廿二年癸丑	四年	三重県津市垂水
廿、伊蘇宮	(磯宮) (磯神社)	廿五年丙辰	一年	三重県松阪市山添町宮前
廿、滝原宮	(多岐原神社)	廿六年丁巳	暫時	三重県伊勢市磯町
廿、滝原宮	(滝原宮)		暫時	三重県度会郡大宮町三瀬川
三、五十鈴宮	(伊勢神宮内宮)		現地	三重県伊勢市宇治館町

鍋倉神社 (式内社)

鍋(埜)倉神社は延喜式に登載されている古い神社であるのに、今はその社殿も無い。

最初は与喜山の頂上に鎮座されたと長谷寺密奏記に記載されており、それが時代と共に下方に遷座せられ、遂に初瀬川近くまで下られ、社殿はなくなり御祭神大倉姫命は、素盞鳴神社へ御祭神素盞鳴尊と相殿で祀られるようになった。

〔大和名所図会〕 寛政三年編纂

鍋倉山 泊瀬山の中にあり

〔明治七年與喜天満神社祠官田守源次調書〕

鍋倉神社 / 祭神 大倉比売命 / 鎮座 字与喜下鍋倉下

〔明治十二年大和国式上郡神社明細帳〕

村社 鍋倉神社 / 祭神 大倉比売命 / 由緒 崇神天皇七年鎮座 延喜式内

境内神社 秋葉神社 / 祭神 大山祇神 (この項斜線で抹消されている)

備考 明治四十一年九月三日日本社並に境内社共全村大字村社素盞雄神社へ合併許可

明治四十一年十月二十七日遷座の旨届出

明治四十二年七月三十一日該境内反別三畝九歩を村社素盞鳴神社へ譲与許可

『長谷寺密奏記』

行仁上人が長谷寺密奏記に長谷寺に係わつて次のような神々とその所在を記している。

滝倉大菩薩 当山地主也、河上二座シ御ス、

清滝神 河上滝下坐シ御ス、

陽神 伊弉諾尊也、東山腰石坐御、南

陰神 伊弉冉尊、東山腰石坐御ス、南

光神 月弓尊也、東山ノ北ノ谷ノ石二坐シ御ス、上、

雨神 同谷ノ石坐御ス、下、

鍋倉神 東山ノ頂二坐シ御ス、

天満天神 今ハ云与喜ノ明神ト、当寺縁起勘出神、今ノ地主也、東ノ山ノ腰坐御ス、

三尾神 今云大河明神、御衣木守護ノ神也、西ノ丘頂二坐御ス、

賀茂大明神 河中ノ大石二坐シ御ス、

富玉大明神 伊勢ノ外宮豊受ノ神也、西ノ山ノ腰二坐シ御ス、

氣比神 十一面堂ノ東北ノ石坐シ御、

氣多神 同方ノ南ノ石二坐御ス、

宝幢神 十一面堂西南石二坐シ御ス、

宝語神 同方北ノ石二坐御ス、

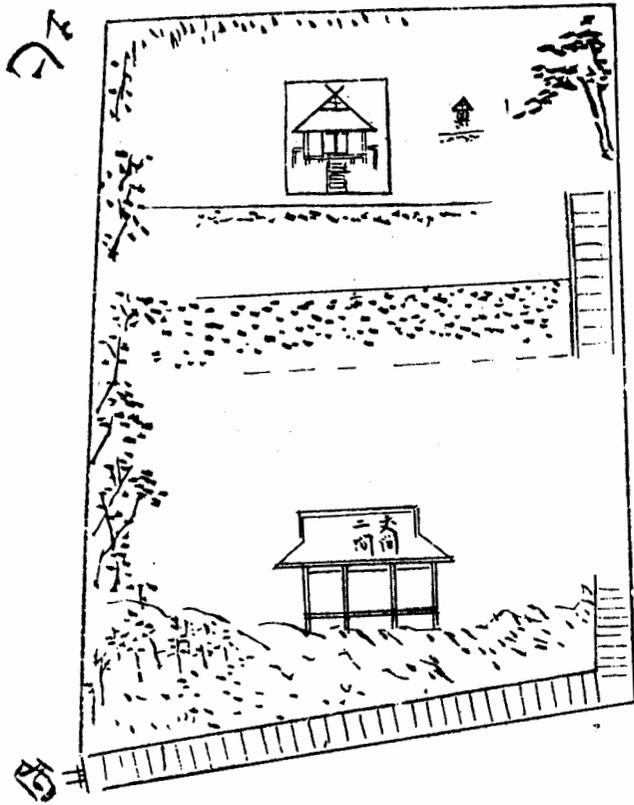
鑑司神 伊勢第一ノ別宮、荒祭神也、雲懸橋ノ脇二座シ御ス、

行仁上人は長谷寺靈驗記に中納言兼隆の末子、恵心僧都の弟子となり、永承七年(一一〇五二年)に長谷寺に來山して寺内に安養院を建て、弥陀を常念し、勸進聖として觀音に仕えた。

# 大和國衣上郡秘瀨村

## 鳩倉神社圖

明治七年<sup>甲午</sup>年九月  
三輪大神社事務所へ届出  
奈良県第四大区三四五区大和国式上郡郷色  
神社取調 図 下案



### 御神像の修理

明治維新の大政官令に依り、おおかたの神社はこれを整理したが、若干の漏れたものは尚お今日に於ても、神殿の奥に神像や仏像を止めている。幸いにして長谷寺鎮守與喜天神社の祭神普公像は温存され、初瀬・上之郷八千氏子の崇敬を蒐めておられる。然し像の腐朽は甚だしく、永く捨ておくことを許されぬ状態となった。大正末、昭和初当時の社司桑山辰蔵氏は関係者と協議の上、奈良県庁当局にしばしば歩を運び、

「天満宮さまが御病氣です。至急御診察を」と上申しした。

係官は危く吹き出しそうになったが、桑山老神官の真摯な態度に氣押されて、兎に角、古仏像修理の父といわれる文部省古社寺保存会委員、奈良美術院長の新納忠之介氏に調査を依頼した。氏も最初は軽い気持ちで出張されたが、神像を一見し、その素晴らしさに驚き、関係諸方面と打合せ急ぎ修理に取りかかられることになった。そして、昭和三年八月十七日から解躰修理が始められた。

ところで、翌日御神像の頭部に一面の神鏡、胎内背面に墨書銘を発見し、一同を驚愕させた。

(昭和三年 豊山学報より 岡田泉師記)

修繕設計見積書

名称 員数 備考

木造天満宮 坐像 志鉢 祭神

現状

本鉢 坐像・極彩色・束帯・冠を頂き、袍衣を着し、拱手笏を執り、左右に袖を張り、半跏趺座

台座 一段畳座・極彩色・梅鉢模様

損傷

本鉢 頭部頂上より面の中央を貫して頸部に至る縦に矧目損傷

首 矧目損傷、左右臂より袖口に至る矧目損傷、左右袖先矧目損傷

膝正面下方横に矧目損傷、裾先矧目損傷

台座 畳座一段、受座紛失

修理

本鉢 前記矧目の損傷は皆取り離し、更に堅く附け直し、矧目を漆にて固め

仕様

着色古色仕上げとす

台座 畳座を受くる為に四方脚つき床几を檜材にて造り極彩色木輪模様仕上

げ

修理実施に際し前記以外損傷の部分ありとも一切を含むものとす

一金四百参拾円也 右修理費

内訳

工科品目	員数	単価	小計
彫工	二十人	一〇〇〇	二〇〇〇
彩色師	二十人	五〇〇	一〇〇〇
指物師	十四人	五〇〇	七〇〇
檜材	二十才	一五〇〇	三〇〇〇
漆	四百目	五〇〇	二〇〇〇
絵具			一〇〇〇
計			四三〇〇

以上

大正十三年四月十日

昭和三年八月十七日

設計者 新納忠之介

與喜大明神修補次第並御神鏡之事

抑々郷社與喜天満宮に安置し奉る普公御木像は去る正元元年五月八日善阿弥陀仏の造立し奉る所にして誠に稀有の靈像たり爾によく年六百七十年を過ぎて材蝕み彩落ちて尊容化しなんとす茲に氏子等後世を顧て歎を興し郡生の無福を悲む諸神膽を照し一天亦誠を感す謹而文部省古社寺保存会委員奈良美術院長新納忠之介に委嘱し昭和三年八月十七日より起首して之が修補を始め奉りぬ工匠等精進潔齋丹誠を凝し肅々として事を進む第二日に至り凶らすも尊像の御頭中に一面の神鏡を蔵めたるを拝しぬ恭しく其の相状を伺ふに六葉形にして直径六寸式分重量二百六匁表には豊山長谷寺本尊十一面觀世音菩薩の御影を細刻し裏に□□□□□□□□の八字を現し本朝始めて見る靈鏡なり伝ふらく普神の父母長谷觀世音に祈誓して之を儲け玉ひしと按するに善阿弥陀仏之に依て本地十一面觀世音菩薩を垂れて普神と化り給ふと釋して斯くせしならむ誠に故ありと謂ふ可し修補の事全く竣り謹而神鏡を再び頭中に蔵め奉る神主氏子総代等神前に拝跪し崇敬の丹誠を被瀝す干時昭和三年八月三十日なり此か修補の次第並に神鏡の事を後世に遺すものなり

杜司 桑山辰蔵 廊坊 逞

主事 新納忠之介

喜多 勘司

白石 義雄

吉川 市造

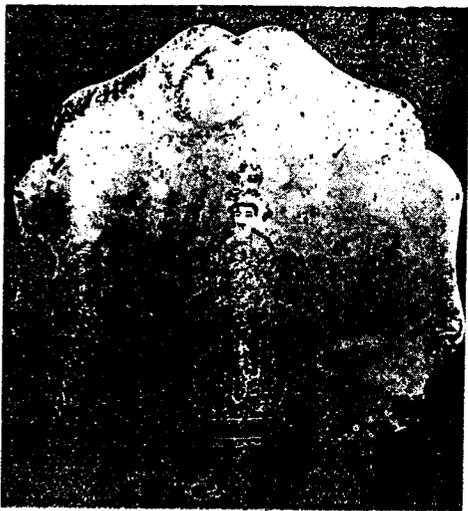
工匠

城本重次郎

馬場喜三三

杉山 秀雄

〔註〕この文は、岡田果師氏が修理に際して、台座裏に書かれた銘文と殆ど同じである。文中□の文字は左図の鏡の周囲に刻まれた八文字である。



小神像

この小神像は、秋の例祭当日の神輿渡御巡幸の際、六舳中、四舳の中から毎年順番に一舳が神輿に搭乗されるが、どの御神像が搭乗されたのかは氏子にはわからない。渡御巡幸が終わり、御神像が神輿から神殿に還御される。宮司の懐に抱かれた御神像が神殿前の中門を潜られる時、宮司が袖の下から御神像をそっと覗かせて下さることが参詣者の興味を引いていた。今は神輿が小さくなり、これ等の小神像は搭乗されず、代わりの御神体が搭乗されるので、従来からの四舳の御神像は神殿でお留守番ということである。

明治二十四年三月に郷社興喜天満神社御由緒調査書を当時の社司が記した中に、木製天満宮座像として八舳の神像の大きさを記している。

一尺二寸 一尺七寸 八寸五分 八寸五分 九寸五分 八寸五分  
一尺一寸五分 八寸

この中で、最初の 一尺二寸の座像には次のような書き込みがある。

「菅原道真公御自作の神像である。但し明治二十一年九鬼図書頭殿御巡視の節御勘定を受、判然せしものなり。」

又、この神像につて次のような話が残されている。

昔（寛平年度ならん）樵夫当山字水ノ谷に小屋を作り、木を挽き居りしに、何人とも知らず小屋の側に物を投じ、但し之を祀れと告て去る。樵夫恠み出てみるに人影を認めざるも音せし辺を探くるに、木像ありければ、直ちに小屋の隅にある道具入の上に檜葉を舗き其の上に奉安し、日暮れ我が家に持ち帰り奉祀し居れり。恰も当時菅公御滞在の時なるを以て、樵夫はこれを公の御作と称し尊崇し居りしを、天曆二年七月神殿太夫武麻呂宝殿を造営し、樵夫より乞い得て奉遷せりと云う。（寛平年度…八九〇年頃）  
鑑定家は、該像を千年以上の古物とせり。

天満宮木造座像

〔郷社興喜天満神社御由緒調査書 明治二十四年 社司 丸山富太郎〕  
什宝器物の項

丈 三尺一寸

但し明治二十一年九鬼図書頭殿の御勘定を請いしに足利時代の作なり

## 拝殿

本誌では創建の時期は不明と記したが、明治二十四年三月に社司が記した與喜天満神社調査書によると、豊臣秀長公の寄進のようである。

……天曆二年九月廿日より祭礼を初めて毎年怠ること無く領主長谷寺より執行せらる。又豊臣氏に至り小堀新助をして普請奉行として当社の拝殿を建築せしめ、保存の爲め禄百石を賜い長谷寺をして管理せしむ……云々とある。

又、明治四十三年十月與喜天満神社財産登録台帳に次の記録がある。

拝殿 平屋瓦葺切妻 桁行七間 梁行二間 十四坪

社伝 文禄三年九月豊臣秀長公の寄付 小堀新助普請を奉行せりと

又、次のような話も伝わっている。

長谷寺は天文五年（一五三六年）六月二十九日 宇陀郡秋山国堅の乱入による不始末により長谷寺山内は殆ど焼失してしまった。その後、復興は遅れていたが、天正十二年（一五八四年）豊臣秀吉の援助によつて復興が始まった。そして寺領として三百両を与え、その三分の一を観音堂の修理費とさせた。このような時、豊臣秀吉の異父弟豊臣秀長を天正

十一年に大和郡山城主とし、天正十三年には百万石が与えられた。そして豊臣秀吉の後を受け継ぎ長谷寺復興を進め完成させた。その頃豊臣秀長は長谷寺にふさわしい僧侶の招請を考え、小堀新助の紹介で和泉国に隠栖しておられた専誉僧正を長谷寺へ天正十五年に迎え、天正十六年に豊臣秀長が臨席し、観音堂の落慶法要が営まれた。

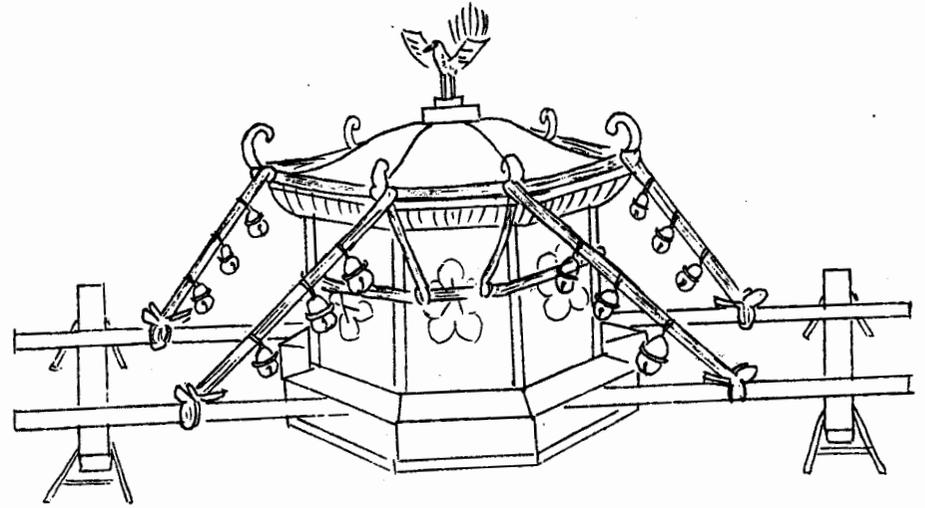
このようなことから與喜天満神社の拝殿は、豊臣秀長の長谷寺復興と共に寄進されたと考えたい。

豊臣秀長公は豊臣秀吉の異父弟として天文九年に生まれ、豊臣秀吉の補佐役としてよく仕え、大和大納言と呼ばれ、大和郡山城で天正十九年に没した。五十一才。

拝殿が寄進された文禄三年（一五九四年）は、豊臣秀長が没した三年後になる。このことについては、後日の調査にしたい。

長谷寺奥院後方の供養塔群の中に、豊臣秀長公の立派な五輪塔が立てられている。

専誉僧正（空賢房専誉）は和泉国大鳥郡の人。享禄二年（一五三〇年）誕生。十三才で出家。康治二年（一一四三年）入寂。真言宗豊山派の開祖。



神社喜天満神社御神輿略図面

凡例

赤線内  
杉木綿使用

神輿

上図は昭和十七年に修理に出されたときの図である。  
この神輿は徳川家光公の寄進であることが明治二十四  
年の與喜天満神社調査書に記載されている。

徳川家光公は慶安三年に長谷寺の観音堂を修理寄進さ  
れている。また與喜天満神社境内の大きな手水鉢に慶安  
三年の刻銘があることを考え合せたとき、神輿内の記  
銘の確認はないが、神輿の寄進は徳川家光公であろう。

與喜天満神社神輿渡御巡幸変遷の経緯

與喜天満神社の神輿渡御巡幸の初めは何時頃か不明だが、神輿が徳川家光公から寄進さ  
れ、その神輿渡御巡幸の様子が江戸時代に描かれた長谷寺蔵の「天神祭礼図」掛軸でよく  
わかる。

神輿渡御巡幸経路の変遷は概略次の通りである。

- 一、午前二時頃本殿前出発↓切石御旅所↓中の橋御旅所↓長谷寺仁王門前↓本殿御帰還
- 二、午前二時頃本殿前出発↓切石御旅所↓中の橋御旅所↓長谷寺仁王門前後出発↓  
↓初瀬入り口↓与喜浦遥拝所↓上化粧坂↓寺垣外↓川上区↓折返し↓初瀬入り口↓  
↓折返し↓町中↓馳向遥拝所↓町中↓本殿御帰還（地図1参照 昭和四年作図）
- 三、午前十一時頃本殿前出発↓切石御旅所↓伊勢辻橋↓与喜浦御旅所↓国道一六五号線  
↓馳向妙光寺↓初瀬小学校前↓中の橋御旅所↓長谷寺仁王門前↓川上区↓折り返し  
↓連歌橋↓寺垣外区↓本殿御帰還（地図2参照 平成五年作図）

神輿渡御巡幸行列は当初から神輿に続いて武者行列が続いたが、その都度郷社與喜天満  
神社社司及び氏子総代が連名で提出されていた道路使用許可申請書から、この武者行列は  
昭和十三年で中止されたようである。桜井警察署へ次のような届書がに提出されている。

御神輿渡御之儀 御届

当神社来る十月二十日例祭執行可致候に就ては全日午前式時より午後拾時迄古例に依り神輿渡御其の中間に於て敬神社より甲冑着用騎馬の者十人全徒歩の者十人武器携行の者七十人供奉行列可致候間此段及御届候也

昭和四年十月十二日

御神輿渡御許可御願

一、日時期間

昭和四年十月二十日 自午前式時 至午後拾時

一、場所及通過路線

初瀬町大字初瀬郷社與喜天満神社頭より長谷寺仁王門に全所より初瀬入口に全所より宇与喜浦に至る全所より上化粧坂を通過し寺垣外を経て川上区に至る更に引返し初瀬入口を経て本町を通過し馳向区に至る路線

一、御神輿 壹台

一、供奉行列者 九十名

右の通り郷社與喜天満神社例祭に付古例に依り神輿渡御致度候間御許可相成度此段連署を以て御願申上候也

昭和四年十月十二日

この許可願を提出したが、桜井警察署から次の文書が社司に届けられた。

「御神輿昇出時間は願書に午後十時迄あるを午後八時迄に制限候付諒知相成度」

御神輿渡御許可御願

一、日時期間

昭和十三年十月二十日 自午前式時 至午後八時

一、場所及通過路線

初瀬町大字初瀬郷社與喜天満神社頭より長谷寺仁王門に全所より初瀬入口に全所より宇与喜浦に至る全所より上化粧坂を通過し寺垣外を経て川上区に至る更に引返し初瀬入口を経て本町を通過し馳向区に至る路線

一、御神輿 壹台

右の通り郷社與喜天満神社例祭に付古例に依り神輿渡御致度候間御許可相成度此段連署を以て御願申上候也

昭和十三年十月十三日

神輿渡御巡幸経路の変遷の記事で、二項の順路の中に与喜浦御旅所よきうらが加わった事についての資料があつたが、何時頃から与喜浦御旅所に神輿の巡幸が行われるようになったかは判然としない。

明治二十四年に当時の社司の調査書につきのような記録がある。

与喜天満神社 (与喜浦御旅所の事)

祭神 菅原道真

由緒

俗伝に曰。当町字与喜浦に菅神を崇神する一樵夫あり(年代不詳)。与喜山に樵す一老翁あり来り画像を授く。捧持して帰り一社を造営して之を崇敬す。其れより年年祭礼の御旅所とす。明治以前に至り樵夫の遠孫捨蔵と云う者あり。当社に奉仕す。世人之を天神捨と云えり。捨蔵に至り家系絶える奉仕する者なし。明治に至り、与喜浦一円より村社の如く仰ぎ奉る。

社殿 桁行 三尺 梁行 一尺

拝殿 桁行 三間 梁行 二間半

別の書類の什器帳に次のような記録がある。

天満宮画像 一軸

但 御自筆と言いつたえ与喜浦に奉祭す

この二つの記録から与喜浦御旅所には菅原道真公の自画像の掛軸が奉祀されているが、区民には「掛軸が祀られている。」との言い伝えだけでその存在は確認はされていない。

与喜浦御旅所は普通民家風の拝殿のなかに社殿が納められている。拝殿前の石垣の中は玉砂利を敷き詰め、一对の石燈籠や石碑が建ち、自然石の手水鉢もある。

拝殿前石垣の入口の両側に一对の石燈籠があり次のような刻銘がある。

東側 正面 与喜天満宮 右側面 天保四年癸巳九月立之 左側面 氏子中

西側 正面 与喜天満宮 右側面 大正二年十月十九日立之

左側面 寄附者一統

後面 発起人 田井 植田 藤木 岩井 井上 井口

石燈籠横の石碑 一金七拾円也 敬神社中 側面 大正二年十月十九日

拝殿前石垣の一つ一つの石には寄附者の氏名が刻まれている。(天保四年…一八三三年)





道明上人廟



長谷寺仁王門

本堂

一、神輿昇 順番 年次

昭和五年度	下ノ森区	昭和六年度	上ノ森区
昭和七年度	柳原区	昭和八年度	寺垣外区
昭和九年度	馳向区	昭和十年度	与喜浦区
昭和十一年度	川上区	昭和十二年度	新町区

〔註〕この順番は、そのまま引き継がれ今日に至っている。

神輿渡御巡幸は、長谷寺の六坊が主となつて実施されていた。その後、與喜天満神社敬神社が結成され、長谷寺と共に渡御巡幸を維持してきたが、昭和四年九月九日午前九時氏子代表者会で次のように議決され、初瀬町八区の共同運営となった。

一、昭和四年度に於て敬神社の神輿廻りが一巡終わる。来年度より、初めて各区抽選を以て神輿廻りを決すること。

一、神輿の昇の示し。

神輿廻りの区は、其の区に於て擲を新調し、経費は区の負担とす。

擲の色別 区一般は 白色 区名に氏名 黒文字

年番は 赤色 何区年番 黒文字

取締は 赤色 何区取締 黒文字

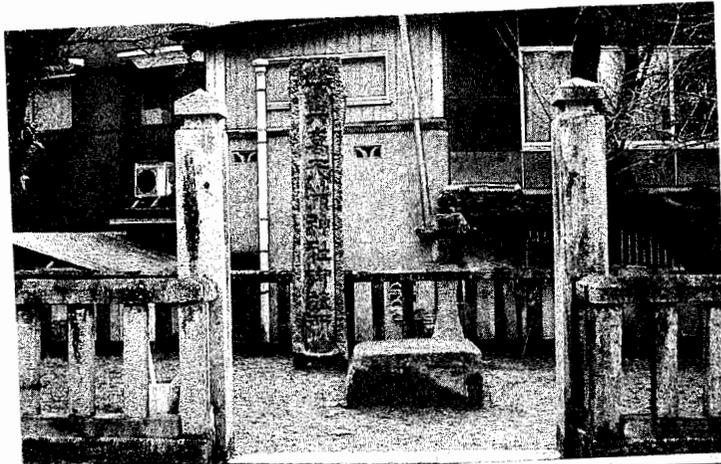
区長は 緑色 何区区長 黒文字

以上は神輿廻りの区にて新調の事

人夫は 黄色 天満神社社務所 黒文字 三筋新調

人夫は社務所にて新調し私祭を以て負担する。

切石御旅所



中の橋御旅所



与喜浦御旅所



松浦武四郎の與喜天満神社へ神鏡の献納

この調査の取組の発端は、神社参道の鳥居の脇に立てられた石碑に『聖跡廿五拜第六番與喜山天満宮寶前』と側面に『発起人 東京 松浦武四郎』と記されている。これは発起人松浦武四郎が天満宮二十五社を選んだその中に第六番として『與喜天満神社』が指定されたのだと思っていた時、三重県一志郡に「松浦武四郎記念館」のあることを知り早速同館を訪ねた。丁度その時、太宰府天満宮に松浦武四郎が奉納した大神鏡の拓本の掛軸が展示されていた。掛軸を拝見し同館の研究員の方から色々教わり資料も頂戴した。

まず聖跡廿五霊社順拝双六に従い一番から順次聖跡を訪ねたが、双六番号十九番尾道御袖天満宮、二十一番防府天満宮、二十二番綱敷天満宮、二十三番太宰府天満宮への参拝は出来ていない。しかしこれらの神社の御厚意により資料を頂戴し、ここにまとめられた。

本誌で一応述べたが、神鏡、石碑の存否について次の一覧表にまとめた。

また、第七番吉野威徳天満宮の神鏡に铸込まれた行場と地名、第二十三番太宰府天満宮の神鏡に铸込まれた天満宮名と地名を判読し後の図に示した。

本誌発行後に、奈良県桜井市初瀬に鎮座する聖跡廿五霊社第六番與喜天満神社に松浦武四郎が神鏡を奉納した期日が判明した。それは明治十八年五月九日である。

聖跡二十五拝	所在地	鏡	碑	備考
1. 菅原院天神	菅原院天満宮神社 京都市上京区烏丸通下立売下ル	◎	◎	
2. 錦天神	錦天満神社 京都市中京区京橋四条上ル	×	×	
3. 菅大臣	菅大臣神社 京都市下京区仏光寺通新町西入	×	◎	
4. 吉祥院	吉祥院天満宮 京都市南区吉祥院成町3	×	◎	
5. 長岡天神	長岡天満宮 京都府長岡京市開田	×	×	
山崎休石天神	所在が不明	-	-	
大和国菅原社	菅原神社 奈良県奈良市菅原町	-	-	
6. 長谷与喜山	与喜天満神社 奈良県櫻井市御蔵	◎	◎	
吉野宮瀧	奈良県吉野郡吉野町宮瀧	-	-	
7. 吉野大威徳	威徳天満宮 奈良県吉野郡吉野町吉野山	◎	◎	鏡は吉野ビジターセンターに展示
8. 道明寺天神	道明寺天満宮 大阪府藤井寺市道明寺1丁目	○	◎	
9. 佐田天神	佐太天神社 大阪市守口市佐太中町7丁目	○	◎	
10. 天満神社	大阪天満宮 大阪府大阪市北区天神橋2丁目	◎	×	戦災の為不明
北野天神	綱敷天神社（北天神） 大阪市北区神山町9	-	-	
11. 露天神	露天神社（お朝天神） 大阪市北区曾根崎2-5-4	×	×	戦災の為不明
12. 福島天神	福島天満宮 大阪市福島区福島	×	×	戦災の為不明
13. 尼崎長洲	長洲天満神社 兵庫県尼崎市長洲本通り	×	×	戦災・震災で不明
14. 須磨綱敷	綱敷天満宮 兵庫県神戸市須磨区天神町	×	×	戦災・震災で不明
15. 明石休天神	休天神社 兵庫県明石市大蔵天神町	×	×	戦災・震災で不明
16. 曾根天神	曾根天満宮 兵庫県高砂市曾根町曾根	◎	◎	
17. 桧笠天神	大塩天満宮 兵庫県姫路市大塩	×	×	
18. 瀧宮天神	瀧宮天満神社 香川県綾歌郡綾南町瀧宮	○	◎	
19. 尾道御神社	御袖天満宮 広島県尾道市長江1丁目	×	○	鏡焼失
20. 聞島速影屋	天神社（飯島神社 攝社） 広島県佐伯郡宮島町	×	◎	
21. 周防宮市	防府天満宮 山口県防府市松崎町14-1	○	○	
22. 博多綱敷	綱敷天満宮 福岡県博多市豊平区	×	×	神社側談話 電話
きぬかけ松	衣掛天神社 福岡県太宰府市国分	-	-	
榎寺	榎寺 福岡県太宰府市太宰府	-	-	
天拜山	福岡県筑紫市天拜山	-	-	
23. 大宰府	大宰府天満宮 福岡県太宰府市太宰府	×	◎	鏡・石碑は 神社資料
24. 攝州上宮天神	上宮天満宮 大阪府高槻市天神町	◎	◎	
25. 北野天満宮	北野天満宮ん 京都市上京区御前通今出川馬場町	◎	×	境内整備の際に不明

〔註〕23.大宰府の鏡の拓本が 松浦武四郎記念館 に掛軸として保存されている。

鏡・石碑欄 … ◎ 所在確認 ○ 存在（聴取及び資料） × 不存在

松浦武四郎が書き残した「乙酉西掌記」の五月九日の項に次のような記述がある。  
 九日。犯雨て出、帯解、丹波市、芝村より三輪に詣し、初瀬に至る。與喜山天神に詣し  
 丸山氏を訪ひ長谷寺の開扉に賽したり。山中牡丹の盛。  
 御仏の誓もかくやふかみ草  
 うべも色香の世に似ざりけり  
 戯れて丸山氏にしめす。氏は連歌を好るよし。  
 一方、與喜天満神社の文書で、明治八年六月に起こされた『什器引渡簿』の中の第三十  
 六号に次のような記録がある。  
 正八寸  
 一 神鏡 裏に第六番  
 與喜山天満宮の銘あり  
 東京外神田拾五番地 一面  
 松浦武四郎寄附  
 明治十八年五月九日  
 この二つの記録から松浦武四郎が初瀬の與喜天満神社に参拝し、神鏡を奉納したのは、  
 明治十八年五月九日であることが確認できた。出会ったという丸山氏は当時の與喜天満神  
 社の社司丸山富太郎氏のようにである。

松浦武四郎が奉納した第七番吉野威徳天満宮、第二十三番太宰府天満宮の神鏡の背面に  
 鑄込まれた銘については、紙面の都合により現物より少し変形させて記述した。

太宰府天満宮の神鏡の記銘の中で、聖跡廿五霊社順拝双六に取り上げられているのに鏡  
 面に鑄込みがなく、反対に双六に登載されていないのに鏡面に双六番号をつけて鑄込まれ  
 ている天満宮がある。従って神鏡と双六との番号の食い違いが生じている。

双六にあつて神鏡にない天満宮：双六番号二十二番ひかき松笠天満宮

神鏡にあつて双六にない天満宮：神鏡番号十六番津田天満宮、十七番大天満宮

次図中の□の社名は双六に記載されている天満宮、  
 ○は双六に記載されてい  
 ない天満宮。○と○は地名、そして港がある。

吉野威徳天満宮の神鏡の記銘について、大峰奥駈七十五なみき廨なみきに含まれている場所には、そ  
 の場所の上に七十五廨の順番の番号をつけた。他は地名、村名等が記入されている。

後に大峰奥駈七十五廨の一覧を記した。この番号は南の熊野本宮を一番とし、順次北へ  
 と進められている。

太宰府天満宮奉納神鏡



吉野威徳天満宮奉納神鏡



吉野威徳天満宮奉納神鏡の記銘



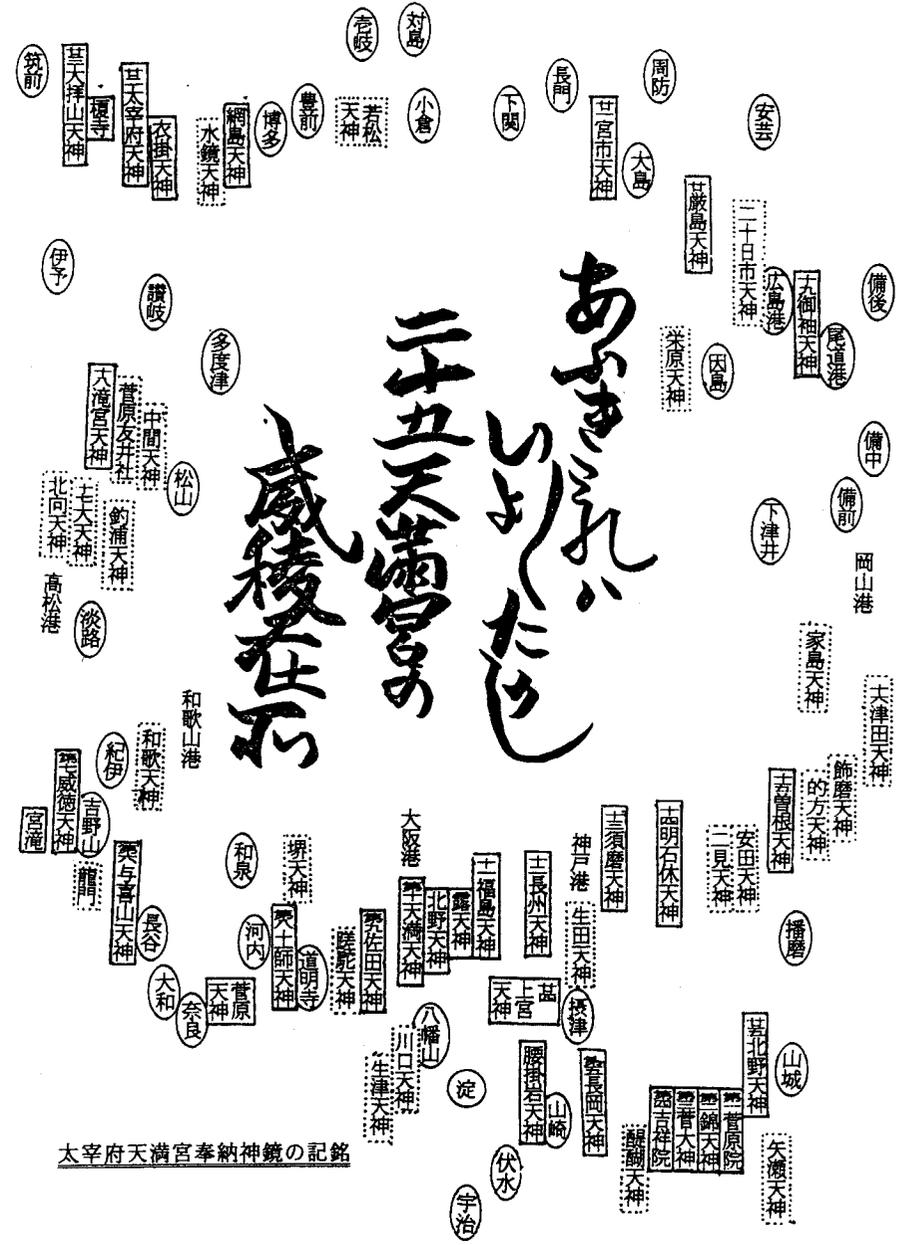
鏡師西京都金森彌輔

幹事  
 大阪 北村栄治郎  
 全 小西善道  
 西都 山田茂兵衛  
 吉野 宮城晋一  
 全 古瀬龍賢  
 前鬼 五鬼熊義問貞

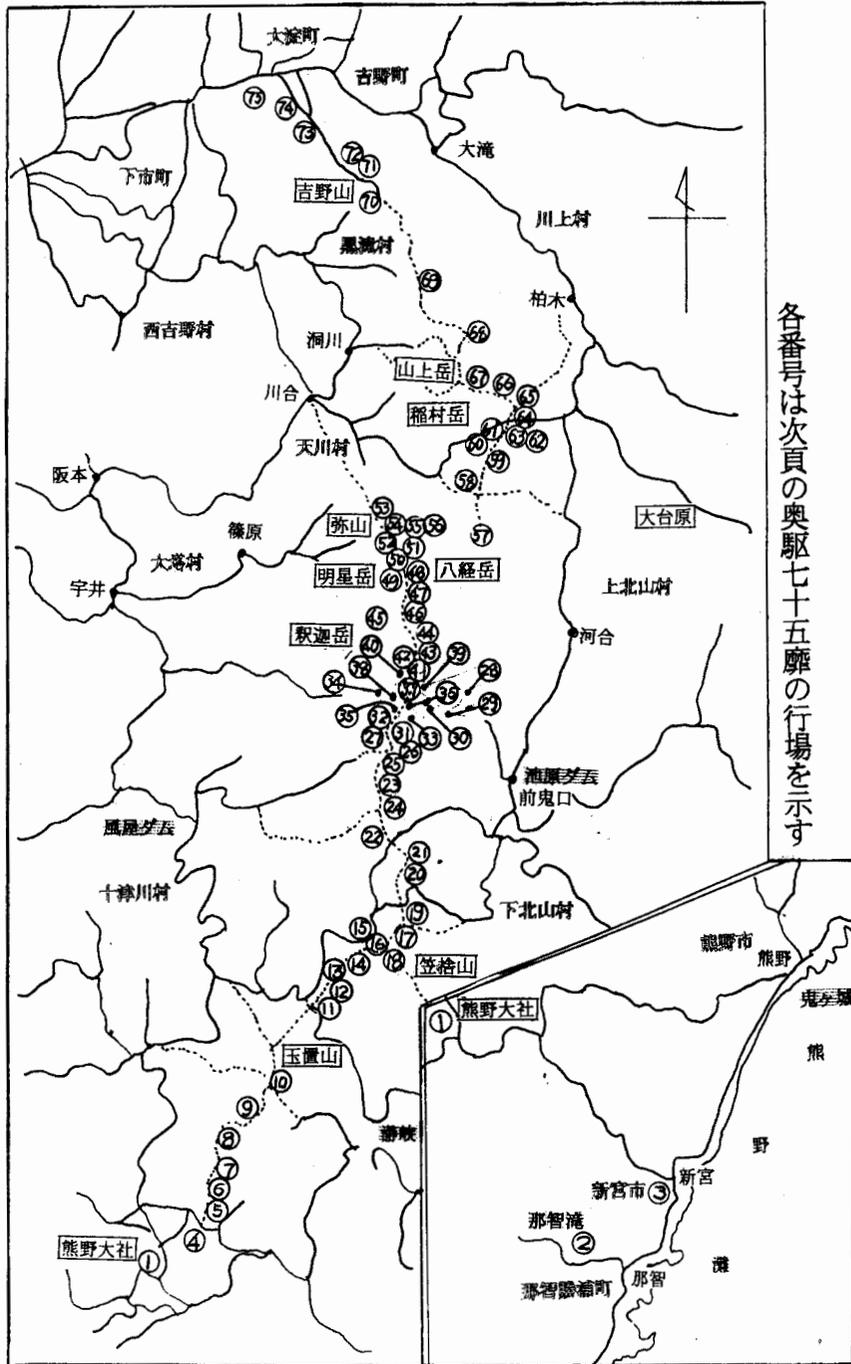
幹事長  
 葛竹林院三十七世古沢龍敬

明治十三年底五月大峯中殿旅行者

# 補正野鏡



太宰府天満宮奉納神鏡の記銘



# 大峰奥駆け七十五磨地図

各番号は次頁の奥駆け七十五磨の行場を示す

おお みね おく がけ なびき  
大峰奥駆け七十五磨 ( ) 内は神鏡の記銘

- |                |               |                |
|----------------|---------------|----------------|
| 1 熊野本宮証誠殿 (本宮) | 26 子守岳        | 51 仏経ヶ岳 (八経岳)  |
| 2 那智山 (那智)     | 27 奥守岳        | 52 古今宿         |
| 3 新宮新誠殿 (新宮)   | 28 三重滝        | 53 頂仙岳         |
| 4 吹越の宿 (吹越)    | 29 前鬼山        | 54 弥山          |
| 5 大黒岳          | 30 千草岳        | 55 講婆世宿 (香波世)  |
| 6 金剛多和         | 31 小池宿        | 56 石休宿         |
| 7 五大尊岳         | 32 蘇莫岳        | 57 一の多和        |
| 8 岸の宿          | 33 二つ石        | 58 行者還り (行者返)  |
| 9 水呑宿 (水呑童子)   | 34 千手岳        | 59 七曜ヶ岳        |
| 10 玉置山         | 35 大日岳        | 60 稚児泊 (児泊)    |
| 11 如意珠岳        | 36 五角仙        | 61 弥勒ヶ岳        |
| 12 古屋宿         | 37 聖天の森       | 62 笙の窟         |
| 13 香精山         | 38 深仙宿 (深山)   | 63 普賢ヶ岳        |
| 14 拝み返し        | 39 都卒門        | 64 脇の宿         |
| 15 菊ヶ池         | 40 釈迦ヶ岳       | 65 阿弥陀ヶ森       |
| 16 四阿宿         | 41 空鉢ヶ岳 (空鉢)  | 66 小篠の宿 (小篠)   |
| 17 槍ヶ岳         | 42 孔雀ヶ岳       | 67 山上ヶ岳 (山上宮)  |
| 18 笠捨          | 43 仏性ヶ岳       | 68 浄心門         |
| 19 行仙岳 (行仙宿)   | 44 楊子の宿 (楊枝)  | 69 二蔵宿         |
| 20 怒田宿 (奴田宿)   | 45 七面山        | 70 愛染の宿        |
| 21 平治宿 (平池宿)   | 46 船の多和 (船多和) | 71 金精大明神 (金峰)  |
| 22 持経宿         | 47 五鉢の峯 (五鉢山) | 72 吉野水分神社 (子守) |
| 23 乾光門 (乾坤門)   | 48 禅師の宿 (小禅師) | 73 吉野山         |
| 24 涅槃岳         | 49 菊の窟 (菊窟)   | 74 丈六山         |
| 25 般若岳         | 50 明星ヶ岳       | 75 柳の宿         |

松浦武四郎奉納神鏡



菅原院天満宮神社



大阪天満宮



曾根天満宮



防府天満宮



上宮天満宮

あとがき

今般『與喜天満神社』を長谷寺に保存されている諸資料からまとめたが、この度、図らずも與喜天満神社の明治期から昭和二十年までの記録が出てきた。本誌の補足と合わせて、資料としてまとめた。

記述の順序は本誌の順に従った。

本誌とこの資料を通して、より深く『與喜天満神社』を理解していただければ幸甚です。

平成十年三月二十五日

土井 正



著者略歴

昭和2年(1927)神戸市で生まれる  
昭和22年～昭和59年小・中学校教員  
昭和53年～現在

真言宗豊山派宗立専修学院茶道講師

與喜天満神社 資料編

発行日 平成十年三月二十五日

編集・発行 土井正

奈良県桜井市初瀬四三五〇  
電話〇七四四・四七・七二七七

印刷 株式会社 中西文山堂

奈良県橿原市今井町三丁目三一・一